

## 【翻 訳】

ローラント・フライモント著

グスタフ・フライタークに与えたチャー  
ルズ・ディケンスの影響(2)

鈴木 敏 夫

第三節 『デイヴィッド・コパーフィールド』中の同名の主人公と『借方と貸方』中のアントン・ヴォールファールト。

『デイヴィッド・コパーフィールド』と『借方と貸方』の主人公の人生航路は、大筋においてではあるが、類似性を有している。いずれにしても対比のし甲斐がある。

二人の少年は幼少年期に隣人の女性から不幸な将来を予言されている。デイヴィッドはというと、彼が真夜中に生まれ、同時に泣き声をあげたからであり<sup>1)</sup>、アントンはこの世で生きるには善良すぎ、それ故に長命をまっとうすることは不可能だ、という理由である<sup>2)</sup>。

アントンが落ち着いた、幸せな幼年期と少年期を両親の家庭で暮す一方、デイヴィッドは幸運と不幸とを交互に耐えなくてはならない。父の死後生まれた子供であり、最初の数年間は母と子守女に甘やかされ、駄目な人間にされてしまう。こうした状況は彼の年若くて、美しく、未経験な母が二度目の結婚をしたとき、変化する<sup>3)</sup>。厳格で、粗野な彼の義父に彼は虐待される。寄宿制の学校は彼には家庭よりも居心地がよい<sup>4)</sup>。母の死後義父はデイヴィッドのために何もしてやろうとはしない。デイヴィッドはブドウ酒店に就職させられる。そこで彼はひどく低級な若者達の仲間になって終日ブドウ酒瓶を洗浄しなくてはならない<sup>5)</sup>。この気の毒な若者はとうとう我慢ができなくなって、ドーヴァーのおばを訪ねる決心をする<sup>6)</sup>。ひどく厳しい耐乏状況で彼はドーヴァーにさ迷って行き、そこで愛情をこめて迎え入れられ、面倒を見てもらう。このときから彼に再び故郷ができるのだ。

アントンの方がはるかに事情がいい。勿論彼は父母を早くに亡してしまう。しかし彼はシュレーター商会で保証された生活と住む家を見つけるために、ただ数日間の旅行をすればすむ<sup>7)</sup>。彼が徒歩で企てたこの旅行はその上彼にお伽噺めいた素敵な体験をさせる。その体験は忘れられることなく彼の心に残るのだ。彼はロートザッテルの館と、上流社会の家庭を知る。男爵令嬢が彼に話しかけ、庭園を案内し、自分の手で池をボートで漕いでくれる。

気の毒なデイヴィッドは自分の母の二度目の結婚のあと、その後の人生に素敵な少年時代の印象を少ししか携えていけない。実直な漁師達の以前はボートだった小さな住居で過した海辺での日々だけが<sup>9)</sup>——そこで彼は恋と友情とを楽しむのだが——僅かにアントンの体験と比較できよう。この邪魔の入らぬ、純粋な幸せを意味するこの同じ輝きは公園と海で過した時の上に照っている。アントンがブロンドで子供っぽいレノーレと一緒に庭園を散策し、池の上をボートでわたると、我々は思わず知らずデイヴィッドがブロンドで小柄のエムリーと一緒に海岸で遊び、貝殻を探しているさまを思い出すのである。アントンとデイヴィッドには子供っぽい初恋がめざめる。この夢が二人にあって青年時代を金色に彩るのである。「あの晴れた四月の正午のように明るい太陽の輝きを見たことがないし、またその古いボートの家の玄関の扉の中に腰をおろして眺めていたときのように晴ればれとした、小さな姿を見たことはないし、また私はこんな空、こんな水、こんな風に光にとり囲まれて船が金色の空気の中を帆走するのを眺めたことは一度もないと今この時に私には思えるのだ<sup>9)</sup>。」

こんな調子でデイヴィッドは物語り、同様にまたアントンは喜びの気持ちを以って素晴しかった時の思い出に耽り、館と庭園の記憶を呼びさまして極上紙の上に書き記し、その光景を金張りの額縁の中に嵌めこむのである<sup>10)</sup>。

デイヴィッドのおばは甥をカンタベリーに連れていく。そこで彼はヴィックフィールド家に宿泊させられ、学校に通う。アグネスの中に彼は誠実な姉とガールフレンドを見る<sup>11)</sup>。シュレーター商会でうまく仕事にとけこみ、ザビーネに忠告と相談の相手を捜し出すことのできるアントンも同じような状態にある<sup>12)</sup>。

学校を卒業した後デイヴィッドはロンドンのスペンロウ (Spenlow) 氏のオフィスに就職し、代理人になる。彼は店主の娘に惚れこみ、今やすっかり怖いもの知らずな恋に熱中する。スペンロウ氏の意志に逆らって彼は婚約する<sup>13)</sup>。

アントンは貴族の世界への立入り許可を得て、レノーレの誠実な崇拝者として幸せなダンスのレッスンに時を過す。しかし彼は、フィンクが彼をこの貴族の世界に引き込んだ口実を耳にしたとき、すぐさま身を退く<sup>14)</sup>。彼はその後商人であることを実証したあと、とくにポーランド革命の間、番頭にならなくてはならなかった。その時彼はその間不幸な目に遭っていた男爵一家から相談相手になることを懇望される。彼はシュレーター商会と疎遠になり、ついには商会から離れ、ロートザッテル家のポーランドにある所領地の管理人になる<sup>15)</sup>。

デイヴィッドは、彼のおばがその財産の大部分を失ってしまったとき、突然独り立ちする状態にあった<sup>16)</sup>。彼は私設秘書、国会の速記者になり、独立した作家の仕事始める。この仕事で彼は間もなく成功をおさめたので、父が死んでしまっていたドーラ (Dora) を故郷に連れていくことができた<sup>17)</sup>。彼は自分の妻を教育しよう、実際的な生活のために教育しようと試みるが、間もなく彼女の子供じみた性格がもうそれ以上成長しそうもないことを見てとる。そういうわけで彼

は、自分の稚な妻の良い面をみて喜ぶことで満足する。しかしほどなくドーラは病気になり、デイヴィッドは結婚生活の短い幸福を楽しんだ後彼女を失わなくてはならない<sup>18)</sup>。彼はスイスに旅行する。そこで彼は三年間自分の仕事のためにのみ生活する。有名な作家として彼は故郷に帰り、アグネスの傍らで永続的な幸福を見出すのである<sup>19)</sup>。

アントンはポーランドの領地で零落した事態を清算しようと努力する。私心を捨てて彼は男爵一家のために働く。そのことは男爵夫人もレノーレも感謝の気持ちで認めているが、しかし盲目の人間として男爵自身はもはや自分で管理し、行動することができないことに苦しんでいる<sup>20)</sup>。

またアントンとレノーレの間にも疎隔が生ずる。彼ら二人の性格は一致しない。アントンは、デイヴィッドがドーラに試みたようにレノーレに影響を及ぼそうとするが、やはり無駄である<sup>21)</sup>。間もなくフィンクに対する愛がレノーレをとらえてしまう。

アントンは残酷なやり方で男爵から解雇されてしまう。がしかし男爵夫人から素晴らしい名誉回復をうける<sup>22)</sup>。首都に帰って、彼はシュレーター商会に定住の地を見つける。彼は商会の共同経営者となって、ザビーネと結ばれる。

### 第三節の注

- 1) DC. I. 3.
- 2) SH. I. 6.
- 3) DC. I. 54 ff.
- 4) DC. I. 78 ff.
- 5) DC. I. 191 ff.
- 6) DC. I. 219 ff.
- 7) SH. I. 13 ff.
- 8) DC. I. 179.
- 9) DC. I. 179.
- 10) SH. I. 57.
- 11) DC. I. 268 ff.
- 12) SH. I. 40 ff.
- 13) DC. I. 481 ff.
- 14) SH. I. 163 ff.
- 15) SH. I. 547 ff.
- 16) DC. II. 78 ff.
- 17) DC. II. 238 ff.
- 18) vgl. unten.
- 19) DC. II. 472 ff.
- 20) SH. II. 1 f.
- 21) vgl. unten.
- 22) SH. II. 282 ff.

#### 第四節 『デイヴィッド・コパーフィールド』のドーラ・スペンロウ (Dora Spenlow) と『借方と貸方』のレノーレ (Lenore) 及びロートザッテル男爵夫人 (Baronin Rothsattel)。

我々は休暇の間海岸でデイヴィッドが受けた印象と、館の庭でのアントンの体験を比較してみた<sup>1)</sup>。今や我々はアントンの体験を、デイヴィッドがスペンロウ氏訪問の際に演じられた全く類似の庭園のシーンとを対比してみたい。

デイヴィッドは夕刻スペンロウの許に到着し、この家の小娘ドーラを見たとき、最初の瞬間から熱中してしまう<sup>2)</sup>。翌日早朝デイヴィッドは庭に出かける<sup>3)</sup>。彼は綺麗なテラスと、木立ちの傍らを通って、足を見晴しのよい並木道へと向ける。この並木道はアーチ状の格子におおわれ、緑の灌木ととりどりの花が一面に生い茂っている。デイヴィッドの考えるのはドーラのことだけ、彼女のことで頭が一ぱいである。突然彼女が彼の前に立っている。彼は頭が混乱し、同時に彼女に会えたことで表現しつくせないほど幸せである。彼らは連れ立って散歩し、ドーラはその子供っぽい、素朴な態度で、またデイヴィッドは惚れこんだ女蕩しみたいに、二人は語り合う。彼らは温室にやってきて、美しいゼラニウムを見て楽しんでいる。その幸せは彼らが朝食に呼ばれたとき終わってしまう。

最初からドーラの出現に調子を合せたこの魅力たっぷりに描き出されたシーンは、フライタークがアントンとレノーレの最初の邂逅を物語るとき、その念頭に浮んでいたということは大いにありそうなことである。

アントンは元気に町に向かって歩いていく。そして彼を小さな森にみちびく道に足を踏み入れさせる<sup>4)</sup>。茂みは手入れの行き届いた庭園の特徴を益々はっきりと帯びてくる。ついにこの徒歩旅行者は広い芝生にたどりつく。その目の前には小塔やバルコニーのついた、ツルバラや野生のブドウの絡んだ大邸宅が立っている。アントンは感嘆しながら、バルコニーから庭をのぞいている男爵夫人とその娘を見つめている。それから彼は自分のやってきた道と出口とを見出そうと戻っていく。そのとき、同じくびっくりしていた男爵令嬢が小馬にのって彼に追いついてくる。

アントンはうやうやしく挨拶し、レノーレは彼の要求をたずねる。彼は彼女に、偶然この庭園にはまりこんでしまったものの、この庭にすっかり魅了されている、と説明する。レノーレは彼をあちこちと案内してまわる。彼らはまるで古くからの知己のように語り合う。花園で彼女は彼のために庭師に頼んで一鉢の苺を提供する。それから彼女は池にボートを漕ぎ出し、やがてアントンは別れを告げる。

二つの小説の中の状況設定は全くよく似通っている。デイヴィッドは愛しいドーラと一緒に妖精の住む庭にでも出かけるみたいに立ち現われる。彼はこの上もない幸福の状態にいる。アントンも同様に美しい少女のいる前でうっとりとしていた。「これは夢だ。若い人だけが夢みること

のできる、そんな美しい夢だ<sup>6)</sup>。」

そして今度は若い女の子たちの番である。彼女たちはその外面からして互いに似通っている。二人共スラリとしている。ブロンドで碧眼である。二人共明るい夏服を着ている。ドーラは一層可憐で子供っぽく、レノーレは元気が一層よくて、意欲的である。彼女達の性格は、連れている動物との交き合い方に特徴が示されている。ドーラはデイヴィッドとよりも彼女が絶えず愛撫しているジプシーとずっとひんぱんに話を交わしているほどだ。洗練された方法であるが、そうすることで、彼女の素朴で遊び好きな本性が表現されている。それとは反対にレノーレはポニーに乗って近づいてきて、アントンに小馬の入れぬ花園を見せてやる時、手綱を馬に投げかえして、浮きうきした様子で馬に蹴りをくれる。「馬は厩舎に戻っていくわ。馴れているんですから。」というのが彼女の発した言葉であった<sup>6)</sup>。

更に二つの似通ったエピソードを加えておきたい。

デイヴィッドはスペンロウ氏とドーラと一緒にドライブを企てる。つまりデイヴィッドは馬車の背後を馬にのってついていくのである。ドーラの顔を見ることができて彼は天にもものぼる心地だった。彼には土埃など眼中にない。ドーラだけを見ていた。「太陽がドーラを照していた。鳥たちがドーラのために歌っていた。南風が彼女に囁きかけ、生垣の野生の花はその蕾にいたるまでドーラのものであった<sup>7)</sup>。」それに対応するのは、アントンとレノーレがした櫓のドライブである。ロートザッテル一家は隣接するポーランドの領主のところへ出かけていき、ヴォールフェールトは彼らのお伴をする。男爵と夫人とは一台目の櫓に乗り、レノーレはその後から彼女の小型の競争用の櫓を操っていて、その御者席にアントンが乗っている。「小さな鐘が平地に鳴りひびき、レノーレは幸せそうに舟型の座席に座って、馬に威勢のよい掛け声をかけていた。彼女はしょっちゅう後を振りかえって、アントンに笑顔を見せた。黒い頭巾の下の笑顔は今日はとても美しく見えたので、アントンの全身全霊が彼女の方へとんでいった。彼女の緑色のショールは風にひらめき、彼の頬をかすめ、顔につきまとい、ために眺望を妨げた。そんなとき彼は緑色のほの暗さに包まれて、まるで彼女の覆い隠された姿を遠来のもののように目の前に見たのである。彼の吐息はたちまち彼女の首にひらめく蝶結びのリボンに触れた。そして彼は、彼女の金髪と白い首筋と彼の手を隔てているのは絹の覆いだけなのに気づいた<sup>8)</sup>。」レノーレはアントンがうやうやしく接吻するその手をひっこめる。しかし彼女にとって幸運とはならない。何故かというレノーレが身体の向きを変えたのとアントンの動きで櫓はバランスを失ってひっくり返ってしまうからである。二人はあきれかえったように雪の中にひっくり返っている。馬だけが平然と道の上に立っていて、「馬なりに独り哄笑している<sup>9)</sup>」。間もなく雪が払い落され、櫓も元通りに起されて、速足で先きへ進んでいく。しかし櫓のお伽噺はこれで終わってしまう。

この二つのシーンには恋の魔法の気分が漂っている。デイヴィッドとアントンは、恋人と一緒に戸外に走り出すことで幸せな気持ちになっている。気分屋で一層情熱屋のデイヴィッドはそも

そもドーラしか見ていない。そして初恋の興奮と歓喜に耽っている。だが冷静なアントンも高揚した気分の中において、彼の魂はレノーレのところにとんでいく。ところで両者に反動がやってくる。デイヴィッドは恋敵を妬んでおり、ピクニックの間にドーラから手をひく<sup>10)</sup>。アントンはレノーレがポーランド人達と激しいダンスで身体を動かしているのを、よそよそしい気持ちで見ている<sup>11)</sup>。彼女の姿はそんなわけでもう彼の気に入らそうにない。「彼はくりかえし考える。彼の知っている他の女性ならば、敵の家の中に張られた蜘蛛の巣の中では決してこんな風にマズルカを踊ったりしないものだ<sup>12)</sup>。」

ドーラは常に幸せな人形みたいな生活を送ってきており、運命の打撃が何を意味するか気づかない。だからこそ彼女は、デイヴィッドが突如一文無しになってしまったことをまるで理解することができない<sup>13)</sup>。彼女は労働や貧困などに耳を貸す気にならない。そしてデイヴィッドが彼女に、ときどき彼女の父の家の経済状態を顧るようと忠告したことにひどく不幸な思いをする。彼女は徹頭徹尾刹那に生きる子供であり、将来のことなど気かけようもしない。彼女にとって最初の大きな苦痛は父の死である。しかし彼女は短時日のうちにその軽薄で子供っぽい気性のせいでその悲しみを忘れてしまう<sup>14)</sup>。

今やデイヴィッドとドーラは彼らの人形の家で結婚する。二人共この上なく幸せである<sup>15)</sup>。ドーラは唯日常の心配事だけは克服することができない。

しばしばほんとにテンヤワンヤのうちに時が過ぎてしまう。しかしデイヴィッドは彼の妻に向かっていささかなりとも非難がましいことは云えない。彼女はこういう非難の言葉を個人的侮辱と解釈し、デイヴィッドのことを彼女が冗談めかして呼んだように、ドーディ (Doady) は私をも愛してくれない、私と結婚したことを後悔している、と考えている。彼女は有能な主婦に、また締め屋さんになろうとスタートしてみるが、準備が冗長で入念にすぎて何んの成果もあがらなかった。「彼女は小型の書き物机をピカピカに磨き、鉛筆の芯をとがらせ、ばかでかい計算帳を買い、ジップが引きちぎった料理の本の頁を針と糸で入念に縫い合せて、『立流になりたい』という絶望的な努力をこころみた。しかし数字は計算されたくないという頑固な癖をもっていた。彼女が一生懸命に二つなり三つの金額を計算書に書きこむと、犬のジップはその頁の上をブラッキ横断し、尻尾を振ってすっかり消してしまう。彼女の右手の小さな中指は付け根のところまでインクの中に浸されていて、私の考えでは、それこそが彼女の達成した唯一の明確な成果であった<sup>16)</sup>。」

レノーレにもドーラ同様家事をきりまわす才能がない<sup>17)</sup>。アントンはレノーレに教え込もうと努力するが、その骨折りも無駄である。彼は彼女のために計算帳に線をひいてやり、家計簿のつけ方を教えてやる。レノーレは熱心にこの新しい仕事にとりかかるが、彼女が入念で正確なのは数日間だけで、それから先き彼女はむしろ森林官と一緒に受持ちの営林区に出かけるとか、ポニーに跨って原野を行くとかして、そのために計算することなどすっかり忘れてしまう。アントン

の愛するしっかりと秩序だった行動様式に対して彼女は才能がない。彼女の激しい、落ち着きのない気性はむらのない家事の始末を認めない。彼女にはまた必要な自制心が欠けている。

デイヴィッドはシェークスピアの作品と一緒に読んで妻を教育しようと努める。ドーラはしかしそれに退屈するだけである。

アントンも同様レノーレと一緒に歴史と英語の勉強をする。しかしレノーレは間もなく、年号を覚えていられないと悩みを訴える。語彙の習得は彼女には残酷である。

こうした控え目な教育的努力はデイヴィッドとアントンにとっては遺憾ながら短期間で終わってしまう。

ドーラと男爵夫人の間にも容易に比較の糸を引くことができる。デイヴィッドは、ドーラの胸に抱かれた子供の笑いが、彼のこの子供っぽい稚妻を一人前の妻に変えることを期待している。そんなことはある筈もない。

「魂が一瞬の間彼の小さな牢獄の敷居の上をひらひらととんでいた。そしてとらわれていることを知らずにそこからとび去った<sup>18)</sup>。」

こうしてドーラの元気は衰えていった<sup>19)</sup>。彼女にはもはやあたりを跳ねまわることができず、横になったままでいなくてならなかった。デイヴィッドは毎朝彼女を連れて階段を降り、夕方には再び上に運ばなくてはならなかった。しかし間もなく彼ははそれさえも中止しなくてはならない。

ドーラは彼の白いベッドの上で痛々しく透き通って伏せており、デイヴィッドのおばが、ドーラのことをそう呼んでいたのだが、彼女の「小さな花」の世話をやいている。この小さな花はしかししおれていく。ドーラは自分でそれを感じている。しかし静かに、朗らかに彼女は自分の運命に耐えている。さてディケンズは、この上なくこまやかな感情をこめて、この穏やかに漂い去っていく「子供っぽい婦人」にどのように思慮分別がつくようになったかを描き出すことができた<sup>20)</sup>。今やドーラには、彼女が妻になるには若すぎたこと、年齢の点ではなく、経験の上で幼なすぎたことが分ってくる。彼にとって分別が足らず、かつ不完全だったので、歳月が経つうちにデイヴィッドが彼女に飽きてしまったと、彼はは考える。「あるがままの方がよかった」と彼女はデイヴィッドに向かって、彼の抗議にも拘らず、言うのである。彼が居間に彼女の姿がないのを知って、空っぽの腰掛けを悲しそうにみていると、彼女はどんなにか幸福に思ったであろう。

彼女はもう駄目であった。彼女の最後の願いはアグネスに向けられている。ドーラはアグネスがデイヴィッドにとり対等な連れ合いだ、ということをはっきりと知っている。アグネスだけに自身の死後後釜になってもらいたいのである。

ドーラ同様、ロートザッテル夫人にも人生の厳粛さが躰けられていない。彼女も甘やかされすぎた女であって、多年に亘り幸福と富裕に恵まれて自分の所領地で好き勝手をしていた。彼女は非常に洗練された社交的な振舞いの持ち主で、また下位の者には親切ではあるが、その排他的性

格を抜け出すことのできない、高貴でエレガントで、しかし浅薄な教養しかない貴族である<sup>21)</sup>。彼女は夫と子供達を愛している。その他に彼女にはもっと深い素質が欠けているかに見える。

今や突然事態が変化してしまう。男爵が投機に夢中になる。彼の性格が変わってしまう。彼は神経質で、興奮し、もはや家族ともお喋りをしなくなる。男爵夫人はこんな状況に苦しみ、それを我慢して耐えぬく<sup>22)</sup>。そこへ重大なショックがおそう。男爵の没落と自殺未遂である。夫人は打ちひしがれるが、おどろくべき自制心とエネルギーでこの苦痛に耐えることができる<sup>23)</sup>。しかし彼女が荒涼としたスラブの館に追放されたとき、彼女の精神力もぐらつき出す。「私にはなんの誇りもありませんし、もう希望もないのです」と彼女は力なく訴える<sup>24)</sup>。そこへ男爵の名前を冒瀆するエーレントールの手紙が届く。夫人はそれを読んですっかりくずおれてしまう<sup>25)</sup>。

ドーラの場合のように人々は彼女の不快感が一時的なものとみている。彼女もまた、すぐに再び元気になると確信をのべる。しかし彼女はもう病床から躰を起すこともなく、病み衰えていく。英雄的な忍耐力で身体と魂を消耗させる悲しみに耐えている。デイヴィッドの稚な妻におけるように彼女の性格、思考と感情が深められていく。彼女の全存在が内面化される。彼女は家庭内にあって調停的な力であって、それがないとアントンは気むずかしくなり、かつ不公平な男爵に耐えていくことはできなかつたであろう。アントンがこの上なく恩知らずなやり方で解雇されると、彼女は彼に、男爵の失われた名誉を回復させる仕事を依頼することで、完全に得心がいくようにさせている<sup>26)</sup>。彼女はもう一度ロートザッテルの名前が非のうちどころのないものに戻ることを、体験したいと思っている。彼女の息子の死後ですら彼女の衰弱の度が増大するのにエネルギーに反抗する。彼女の唯一の願望は実現される<sup>27)</sup>。アントンは自分に与えられた課題を解決する。また彼女はレノーレが活力に溢れたフィンクの傍らにあって安全なことを見てとる。しかしやがて、なお彼女を生にしっかりと繋ぎとめておいた細い糸がちぎれてしまう。そして夜にこの「青ざめた、外国からやってきた女性<sup>28)</sup>」は彼女の最期の床で静かに厳粛に横たわっている。

#### 第四節の注

- 1) s. o. S. 52 f.
- 2) DC. I. 481 ff.
- 3) DC. I. 486 ff.
- 4) SH. I. 14 ff.
- 5) SH. I. 19.
- 6) SH. I. 18.
- 7) DC. II. 58 f.
- 8) SH. II. 61 f.
- 9) ここでミスタ・パーキスの馬のことを思い出す。この馬もまた人の耳に聞えるように独りクスクスと笑うのである。(DC. I. 36.)
- 10) DC. II. 59 ff.
- 11) SH. II. 66 ff.
- 12) SH. II 68.



- 13) DC. II. 128 ff.
- 14) DC. II. 150 ff.
- 15) DC. II. 248 ff.
- 16) DC. II. 262.
- 17) SH. II. 59 f.
- 18) DC. II. 328.
- 19) DC. II. 329 ff.
- 20) DC. II. 411 ff.
- 21) SH. I. 24 ff.
- 22) SH. I. 236 ff.
- 23) SH. I. 526 ff.
- 24) SH. II. 183.
- 25) SH. II. 195 ff.
- 26) SH. II. 285 ff.
- 27) SH. II. 397 ff.
- 28) SH. I. 398.

#### 第五節 『デイヴィッド・コパーフィールド』のアグネス・ヴィックフィールド (Agnes Wickfield) と『借方と貸方』のザビーネ・シュレーター (Sabine Schröter)

ミス・トロットウッド (Trotwood) と彼女の甥のデイヴィッドはカンタベリーのヴィックフィールド氏のところへ乗物で行く<sup>1)</sup>。帳場で迎え入れられてから、彼らは静かで非難の余地のないほど清潔な上流社会に属する市民の家の客間に案内され、びかびかと輝くオーク材の床と同じ材質の張天井の古くて暗い応接室に足を踏み入れる。大きな彫刻をほどこした、赤と緑の花模様で覆れた家具、奇抜な小型のテーブルと隅々に置いてある書架はこの部屋に大層居心地の良さそうな、くつろいだ印象を与えている。「全ての物の上に、この家を外面的に際立たせている、隠遁的なところと清潔さを示すこの同一の息吹きが漂っていた。」

ここにデイヴィッドは一つの新しい家庭を発見し、ここで自分の「守護霊」と知り合う。つまりヴィックフィールドの娘のアグネスである。彼女は凡そデイヴィッドと同年齢で<sup>2)</sup>、しかし小さな家政婦として紹介され、その若さにも拘らず、真面目で、口の堅い主婦のように見える。父親がデイヴィッドについて語る時、彼女は生き生きとした理解を示しながら、その話に耳を傾け、やがてデイヴィッドが住むことになる、上の部屋を検分するために皆と一緒に案内する。

デイヴィッドはアグネスの甘美で愛らしい顔立ちにすっかりボーッとしてしまう。彼は彼女の美しい眼の落ち着いた輝きから視線をそらすことができない。彼女の物腰は幸せと、満足感とかぎりない善良さを発散させている。そして最初から彼女の印象は運よく彼の心の中に根づいていく。

これと全く似通った印象をアントンは、はじめて店主の住居に入っていったときに受ける<sup>3)</sup>。

この住居の貴族的で、それでいて質素な快適さ、そのピカピカの清潔さ、市民的貴族の家庭の個性はイギリスの代理人の家を想起させる。プレスラウのモリナリ (Molinari) の堅実な商家が確かにシュレーター商会のお手本として使われたにも拘らず、ヴィックフィールド家との類似性が我々の注意を惹く。アントンは沢山の応接室を通り抜けていく。「その家具調度の落着きのある、堅牢な輝き」、背の高い壁面の鏡とずっしりとした材質、絵と花台と滑らかな寄木細工の床が彼に堂々たる印象を与えている。召使は仕切り幕をはねのける。アントンはザビーネの前に立つ。アントンより年長ではないのに彼女は体面を保つ主婦の威厳と物腰を見せている。彼女は関心を示しつつ、好意的に、彼の気にいったか、どんな風にやりくりをしていたかを尋ねる。

「私の妹が我々皆をとりしきっているのです。もしあなたに何か金銭的な要望があったら、ここで申立てて下さい。彼女は 善い妖精で、家計をきちんと守っているのです。」と商人はアントンに云う<sup>4)</sup>。

アグネスは父のためにのみ生きている。昼食の際に彼女は父と向い合せに座らなくてはならない。そしてデイヴィッドは、もしアグネスが居なければ、ヴィックフィールド氏はそもそも食事をすることさえ可能なのかと疑ってみる。ディナーの後で彼女は父のために社交をとりしきる。彼女は彼にポートワインを一杯注ぎ、彼を娛しませ、彼にピアノを弾いて聞かせる。それから彼女はお茶の用意をし、就寝の時刻まで彼の側から離れない<sup>5)</sup>。

ザビーネもまた食卓で司会をつとめ、兄の横に席を占める。彼女もまた兄のためにのみ、そしてその家のためにのみ生きている。女の手で彼女は人の面倒をみることを心得ている。家とその住人に必要なあらゆることに彼女は心を砕いている<sup>6)</sup>。

心労や心配をアグネスとザビーネはひそかに自分の心の中にしまいこんで、他人には何事も気づかせまいとする。彼女たちは一様に思いやりが深く、よく気づく。ザビーネは独りでいる時だけ、自分の感情のままに行動する<sup>7)</sup>。

歳月は過ぎ去り、デイヴィッドはその後カンタベリー<sup>8)</sup>の学校に通う。彼の補佐役で相談相手のアグネスは、彼と共に彼の学校の成績を喜び、新たな努力へと鼓舞する。彼が取っ組み合いの喧嘩で打ちのめされ、血まみれになって帰宅したとき、彼女は慰めてやる。彼女は彼の若者の熱狂状態の中で心の許せる人である。そしてデイヴィッドは、アグネスが自分を愛しているのに気付かない。彼は立ち去る前に、とくに彼が真剣に人に惚れることがあれば、いつでも彼女に全てを打ち明けると誓う。そのさい彼は、アグネスがいまだかつて人に惚れたことがなかったという彼の驚きの気持ちのをのべる。彼女の心が彼に対して高鳴っているのを感じとれない。

同じくザビーネはアントンの面倒をみてやる。次第にアントンとザビーネの間に緊密な意見の一致が形づくられていく<sup>9)</sup>。彼ら是一緒に居ることを嬉しく思い、ひんぱんにかつ進んで話を交すようになる<sup>10)</sup>。アントンがポーランドから戻ってきたとき、商会全体が興奮している。その最たる者はザビーネである。彼女には彼を迎え入れる十分な準備ができていない。彼女は彼の部屋

を飾り、できるだけ居心地のよいようにと整える<sup>11)</sup>。

アグネスはデイヴィッドが友人のスティアフォースに対して注意を払うように警告し、スティアフォースの影響を余りうけないようにと頼む<sup>12)</sup>。何故かというところの影響は、アグネスが判断しえたかぎりでは、最善の結果をもたらさなかったからだ。スティアフォースに関する話し合いのうちにデイヴィッドは自分の姉にしてガールフレンドがはじめて泣くを見るからである。彼女は父の容態を心配している。しかし彼女はすぐに気を静めることができ、間もなく彼女の美しい、落ち着きのある物腰に戻っていく。同様アントンはあるとき、ザビーネが花台の傍らに立って、声をたてて泣き、または嚙り泣きそうになるのを断固として抑えようと戦っているのにおどろかされる<sup>13)</sup>。彼が彼女に気付いたとき、気を静めて、フィンの無鉄砲さに注意するように警告を発する。アントンは自分の友人を弁護する。しかしザビーネは彼に次のような奇妙な表現で答える。「フィンさんは、他の人間にとって神聖なもの全てを弄ぶことがお好きなのです。」こうしてアントンは彼女の秘かな苦痛の仲間となる。

デイヴィッドにとってアグネスは、またアントンにとってザビーネは単に信頼のおける人または助言者であるだけではない。その上権威でもある。デイヴィッドがドーラと婚約したとき、彼はすぐさまアグネスに宛てて手紙を書いている<sup>14)</sup>。彼には、彼女に全てを伝え、彼女の意見を訊ねたいというのっぴきな欲求があった。「まるで私の心は、愛と友情、不安と期待もしくは失望に向きを転じて、そこに避難所と最良の友人を見つけたみたいです<sup>15)</sup>。」デイヴィッドがアグネスからの返事を読んだとき、彼は彼女の話す声を聞いているように思う。「私の耳に彼女の真心のこもった声が響いている。これ以上私に何を言うことができよう!<sup>16)</sup>」アグネスは静かに諦めながら彼女の愛を一人耐えている。彼女はデイヴィッドの幸せを喜んでいる。彼女は嫉妬を知らない。ドーラと彼女の最初の出合いはなんと魅力的に描き出されていることだろう<sup>17)</sup>。ドーラは隠れ家から引き出されなくてはならない。彼女は利口すぎるアグネスを恐れている。しかし幼い花嫁が彼女の新しい女友達の愛らしい顔と美しい目を見たとき、彼女はうれしいおどろきの叫び声をあげて、アグネスの首にしがみつく。このときからデイヴィッドは花嫁が一層好きになる。何故かというアグネスがドーラを褒めたからである。

同じようなやり方でアントンはザビーネの判断を頼りにしている。彼は再び故郷に滞在することを幸せに思っている。その時突然男爵の事件を整理するためロートザッテル夫人から招かれる<sup>18)</sup>。そのために彼はシュレーター氏と仲違いをする。「でもあなたは私にとって縁遠い存在となることはできません。」とザビーネは、ヴォールフェールの脇を通りすぎりに小声で言う<sup>19)</sup>。

彼がひどい疑惑の中であって、すっかり男爵に仕えるようにという夫人の申出を受け入れるべきか否か決心がつかずにいたとき、彼はザビーネのところに出かけていく。「彼はこの件を引き受けるべきでしょうか。それともここに留まるべきでしょうか？ 彼には分らないのです。私と他人にとって何が正しいのか教えて下さい<sup>20)</sup>。」そしてザビーネは自分の希望をうち壊す彼の心

情の吐露に耳を傾けた。目に涙をため、愛と苦痛にみちた声で彼女はきっぱりという。「あなたに呼びかける声に従いなさい。ヴォールファールト行きなさい!<sup>21)</sup>」

打ち沈んでザビーネは諦めなくてはならない。アグネスが、ユライアとその母を前にした彼女の父への配慮から、果さなくてはならぬ辛い義務に、泣き言も言わず従うように、ザビーネは無私の態度で時間と労働とを彼女の兄のために捧げる<sup>22)</sup>。

ドーラは死ぬ。ひどい苦痛と意気消沈の時期にアグネスはデイヴィッドに手を貸す。

長い間彼の不在のままに過した後彼女は彼をいつも変らぬ姉のように迎える。

デイヴィッドはしかし純化されている。彼は、アグネスが彼にどんな意味をもち、また不断に意味を持ち続けていくかを心得ている<sup>23)</sup>。彼は思いきって口に出すまで、長いことためらっている。何故なら、アグネスの心が傷ついていること、また彼女が彼に一つの秘密をかくしていることを、彼は感じとっているからである。ついに彼は適当な言葉を見つけ、自分の心をうち明けてくれるよう彼女に懇願する。彼女は拒否する。彼女を姉以上の存在と呼びたいという希望を語ったときになってはじめて、彼は彼女の秘密を知るのである。彼女はその柔らかな手を彼の肩の上におき、彼の顔の中を落着いてのぞきこむ。「それが何かあなたは知っていますか？ 私はこれまでずっとあなたを愛してきたのです<sup>24)</sup>。」

アントンもまたシュレーターとザビーネの許に戻っていく<sup>25)</sup>。彼が客人として商館にとどまり、男爵の事件をすっかり整理している間、また別離の時間が間もなく告げられるのを不安をいだいて考えていた間、ザビーネは商売に従事している。アントンをひきとめることができ、彼に新しいポストを提供したのは彼女である。つまりアントンは彼女の夫になり、シュレーターの共同経営者になる<sup>26)</sup>。

#### 第五節の注

- 1) DC. I. 271 ff.
- 2) DC. I. 277: 「凡そ私自身の年齢の」
- 3) SH. I. 64 f.
- 4) SH. I. 65.
- 5) DC. I. 279 f.
- 6) SH. I. 103 ff.
- 7) SH. I. 105 f., vgl. oben S. 27; ferner SH. II. 101 f.
- 8) DC. I. 328 ff.
- 9) SH. I. 369; 549 f.
- 10) SH. I. 497.
- 11) SH. I. 487 ff.
- 12) DC. I. 451 ff.
- 13) SH. I. 145 ff.
- 14) DC. II. 67 f.
- 15) DC. II. 68.
- 16) DC. II. 68.

- 17) DC. II. 217 ff.
- 18) SH. I. 551 ff.
- 19) SH. I. 567.
- 20) SH. I. 573.
- 21) SH. I. 575.
- 22) SH. II. 100 ff.
- 23) DC. II. 501 ff.
- 24) DC. II. 535.
- 25) SH. II. 309 ff.
- 26) SH. II. 403.

第六節 a) 『デイヴィッド・コパーフィールド』のミスター・ウィックフィールド (Mr. Wickfield) と『借方と貸方』のシュレーターとエーレントール (Ehrenthal)。

英国小説中の代理人と『借方と貸方』中の二人の非常に異なった商人とを比較することができよう。

ウィックフィールド氏の場合くりかえして使われる言いまわしが我々の目を惹くが、それは彼のスローガンになっている。彼はできるかぎりひんぱんに次のことを主張している。つまり彼は彼の一切の行為につねに唯一の動機しか持っていないということである。即ち自分の娘に対する愛である<sup>1)</sup>。ウィックフィールドは絶えずアグネスのことだけを考えている。彼女は彼にとって全てである。シュレーター氏もまた同じ暮らし方をしている。妻を失った後、彼は自分の本当の子供同様に甘やかして育てた妹と商売のためにだけ生きてきた<sup>2)</sup>。彼女のために彼は車や馬をかかえ、彼女のために夜会に出席したり、人を招いたりする。しかしこうした事態は、我々が既に上で見てきたように、相互依存の関係にある<sup>3)</sup>。つまりアグネスは彼女の父のためにのみ生き、ザビーネも家計への配慮と、兄の世話に没頭する。

ウィックフィールド同様エーレントールもまたより高い人生の目的をもっている。つまり彼は自分の息子のためにできるかぎり人生を快適なものにしてやろうとする<sup>4)</sup>。カンタベリーで過ごした最初の頃のある晩デイヴィッドはウィックフィールドと二人きりである。ウィックフィールドは、デイヴィッドにこの新しい家庭が気に入っていることをうれしく思っている。「我々が送っているのは単調な生活だ」と代理人は真面目な調子でつけ加えて言う<sup>5)</sup>。同じ言葉をアントンはシュレーターから聞かされる。「あなたの人生は何事によらず時がたつにつれ単調なものに思われるでしょう。我々の家には厳しい規律が支配しているのです<sup>6)</sup>。」

ウィックフィールド氏はアグネスを自分が食べ物にしているのだと自分を責める。彼女が彼のためのみならず、とりわけ自分自身のために生きることは是非とも必要なことである、と彼は考える。しかし彼は彼女なしでやっていくことができない。そうするには彼には意志の力が欠けて

いる。彼は長期間アグネスを手ばなす気になれない<sup>7)</sup>。

シュレーターも同様、もしフィンク氏のプロポーズを断ったら、ザビーネが犠牲になると感じている。しかし彼女は、生活享受派の社交家の妻には自分が向いていないこと、また相手を断念しなくてはならぬこと、そして商家における自分の場所を捨てることが許されぬことを心得ている<sup>8)</sup>。

ヴィックフィールド氏には悪い癖がある。ブドー酒の飲みすぎである。ユライア・ヒープはこの弱点を食い物にして成功し、その結果彼は主人をついにはすっかり自分の意のままにする<sup>9)</sup>。エーレンタールにも同じことがおこる。彼のもって生まれた不注意なところと、彼の書記のずる賢さが彼を破滅させてしまう。

ヴィックフィールドとエーレンタールの行きつく先きは異なっている。エーレンタールが狂気に行きつく一方<sup>10)</sup>、この代理人の方はその癖を止め、ユライアが正体をあばかれた後でアグネスとデイヴィッドの二人の子供の幸福をみて楽しむことができる<sup>11)</sup>。

#### b) 『デイヴィット・コパーフィールド』のミセス・ステアフォース (Mrs. Steerforth) と『借方と貸方』のエーレンタール。

両親の子供に対する愛情が二つの小説で大いに強調されている<sup>12)</sup>。この大きな愛情の影響をうけて、この二人の、その他の点では全く異なった人間の運命は同じ進路をたどる。

ミセス・ステアフォースは彼女の息子のためにのみ生きている。「彼女の息子のジェームズ以外のことを語ったり、考えたりすることができぬみたいであった<sup>13)</sup>。」この息子の肖像や手紙を彼女は暖爐の火の側の彼女の腰掛の傍らの小さな戸棚の中にしまっておくが、それはいつもすぐ手にとることができるようにとの配慮からである。母と息子はどの点からみても似ている。この二人には二つの特性が目立っている。勿論それは年齢と性別とで中和されて表われている。つまり高慢さと激情とである<sup>14)</sup>。「私(デイヴィッド)は一度ならず考えたものだ。彼ら(ミス・ステアフォースとジェームズ)の間に不一致の由々しき原因が一度も生じなかったら、どんなに素敵なことであろう。というのはこのような二つの本性は——私はむしろ同一の本性のこの二つの陰というべきであろうが——創造のもっとも大いなる対立以上に宥和することが困難であったかも知れない<sup>15)</sup>。」そしてデイヴィッドは正しい判断を下している。

ミセス・ステアフォースと同じような過度に熱狂的にエーレンタールは息子を愛する。こすからい商人のエーレンタールがある一つの理想的な動機に駆られてしばしば価値の低い商売に左右されるさまには、どこか感動的なところがある。つまり彼の息子は常に誰からも妨害されぬ幸福を享受することができなくてはならないのである。エーレンタール夫人が息子に、「日曜日の」パーティーと一緒に出かけよう勧めるシーンを比較してほしい<sup>16)</sup>。彼女にとって、よその娘たちが自分をよく見せびらかすのが楽しみなのである。今や彼女は「大いに機知のある男として」

自分の息子を自慢しようと思っている。しかしエーレントールが割り込んでくる。彼の息子は自分自身の意志を持たなくてはならぬ。もし息子が人々の集りの中に出て行こうとせぬなら、彼はそれを放っておきたい。しかしベルンハルト (Bernhard) は、居間から出ていくために、また自分の青ざめた顔色が消えてなくなるために、馬を一頭手に入れなくてはならぬ。エーレントールは息子を桃でもって喜ばせようと思う。ベルンハルトにアントンが気に入っていると聞くと、すぐさまアントンが招待されなくてはならない。エーレントール夫人は、アントンがまだ自分の家を一度も訪問していないことに触れるが、父親は憤激して叫ぶ。「もし彼がうちのベルンハルトと知り合いだというのなら、何んのために出入りの許可など必要なものか。何んのために彼は先ず我家への出入りの許可を得なくてはならないのか？」ここにユダヤ的マナーと話し方が完璧に描き出されている。またユダヤ人のタイプが芸術的に分類されている。ユダヤ人は実物通りに扱われており、彼らの特徴的個性に従って様式化されている。ここで問題となりうるのは紋切り型の表現ではなく、様式ということである<sup>17)</sup>。エーレントールは息子のためにもっと多くを望んでいる。ベルンハルトのために彼は男爵の所領地を独り占めしようとし、冷酷な奸計と打算的な商人気質の全ゆる手段を使ってこの目的のために行動している。

我々はフライタークのもっとも成功したシーンの一つを批評したのであるが、こんどは『デイヴィッド・コパーフィールド』の特に印象的なシーンに目を向けてみよう<sup>18)</sup>。

スティアフォースとエムリーは逃げ去った。老ペゴティーとデイヴィッドはミセス・スティアフォースのところへ赴く。彼らは、ジェームズがエムリーを彼の妻として連れ戻そうとするのかどうかを知りたがっている。ミセス・スティアフォースはこうした無理な要求に硬化してしまう。「そんなことは無理です。彼は屈辱を感ずるでしょう。あなた方は、彼女が彼よりひどく劣っているということを知らなくてはなりません。こういった結婚は私の息子の出世を永久に台無しにしてしまいます。」ミセス・スティアフォースはその上代償として金子を提供しようとさえする。がしかしミス・ペゴティーから相応の返事をうけることになる。この場面は躍動する生気に溢れている。老ペゴティーの粗削りな雄弁は力強くかつ真実をこめて描き出されており、一方において貴族的尊大さ、誤った高慢さとエゴイズム、他方では朴訥な誠実さと本物の誇りと利他主義の対立が見事に作り出されている。ここでディケンズは彼の見解を主張している<sup>19)</sup>。

ミセス・スティアフォースは、ジェームズがその気紛れさを放棄することを期待している。そうすれば彼は彼女に再び歓迎される筈である。彼女は待ちつくす。しかし彼は戻ってこない。彼女は手紙を書き懇願するが彼は従わない。そこで彼女は忍耐がきれ、気狂いじみた頑固さを発揮して彼が家に入るのを禁じてしまう<sup>20)</sup>。今や怖るべき時がやってくる。デイヴィッドは彼女に息子の死の報告をし、彼女はローザ・ダートル (Rosa Dartle) の激しい非難を聞かなくてはならない。彼女は無抵抗で全てを耐え忍ばなくてはならない。大理石像のように硬直した彼女は自分の部屋に横たわり、かすかな呻き声だけが彼女の胸からかろうじてもれ出る<sup>21)</sup>。

『借方と貸方』では息子は父を許すことができない。ベルンハルトは重病である<sup>22)</sup>。息子は父に、所領地に対する請求権を放棄することを要求する。息子の非難に深く心を動かされて、父エーレンタールは動揺する。しかし彼はこの理想主義者の立場を理解することができない。ついに彼は折れて、有価証券を男爵に戻すことを約束する。しかし有価証券は盗まれて、エーレンタールが瀕死の息子の床に駆けつけたとき、息子は脅すように手を挙げ、後ろに倒れて死ぬ。

デイヴィッドはアグネスと結婚した。毎年彼はミセス・スティアフォースを訪問する。くりかえし彼は同じ場面を体験するのである<sup>23)</sup>。ミセス・スティアフォースは腰が曲り、老いている。しかしその顔立ちは相変らず美しいが狂気で歪んでいる。「あなた。あなたに会えて嬉しく思います。」と彼女はコパーフィールドに向かって言う。「あなたが喪中だということは残念なことです。私は時があなたの心を和げてくれることを願っています。」それはデイヴィッドが彼女にジェームズの死を告げたあの日、彼女がのべたのと同じ文句である。当時デイヴィッドはドーラのことを悲しんでいた。「あなたは私の息子に会ったのですね」とミセス・スティアフォースは語り続ける。「あなたは和解されたのですか？」と。突然彼女は呻く。彼女の息子が死んだという怖るべき事実が彼女の心に襲いかかる。彼女は泣きながら崩おれる。

エーレンタールもまた息子の死によって理性を失ってしまった。狼狽えた彼は有価証券を探し、男爵家に赴き、罵りかつ呪う。最後に我々は彼がロザリーエとイツィヒの婚約の日を見る<sup>24)</sup>。白痴のごとき老人として彼は肘掛椅子にのって部屋の中に転りこむ。髪は真白で、顔は腫れ上がっている。身体は曲っている。突び出した眼で彼は多彩な人の集りをじっとみつめていた。彼の妻は彼に、親戚が集ったと説明してやる。「私は知っているぞ。こいつは夜会だ。彼らは皆大夜会に出かけていった。……そして私は彼のベッドに座っていた。ベルンハルトが老父のところへやってこないというのはどうしてだ。ベルンハルトはどこへ行ったのか？」と彼はとうなづく。「旅行に出かけたのですよ」という返事がかえってくる。彼はそれに驚き、理解ができない。しかし彼はベルンハルトは馬を一頭と領地を買い与えようと思っている。突然彼は臨終の息子のことを思い出し、また息子が振り上げた脅すような手を思い出す。彼は呻きながら腰掛に身を沈める。

両作品とも子供に対する度はずれな愛情が描かれる。それは『デイヴィッド・コパーフィールド』ではエゴイズムに基き、『借方と貸方』では無私の態度にもとづいている。イギリスの小説では母と息子の間の断絶が、ドイツの小説では父と息子の断絶である。子供達は両親と和解することなく死んでいく。両作品に存在するのはまことに怖るべき絶望である。ミセス・スティアフォースとエーレンタールの理性は打ちくだかれてしまう。記憶は息子の死が伝えられ、あるいは息子の死が引き続いて起る情景で停滞してしまっている。そして彼らはこのシーンを改めてとことんまで体験し尽さねばならない。そしてくりかえし、子供達が彼らを永久に捨て去ってしまったという確信にたどりつかざるをえない。



## 第六節の注

- 1) DC. I. 273 f.
- 2) SH. I. 70 f.
- 3) s. o. S. 65 f.
- 4) s. u.
- 5) DC. I. 289.
- 6) SH. I. 65.
- 7) DC. I. 289.
- 8) SH. I. 364.
- 9) s. o. S. 44.
- 10) s. u. S. 74 f.
- 11) DC. II. 502 ff.
- 12) vgl. Wickfield!
- 13) DC. I. 366 und ff.
- 14) DC. I. 535.
- 15) DC. I. 535.
- 16) SH. I. 276 ff.
- 17) s. o. S. 12.
- 18) DC. II. 39 ff.
- 19) s. o. S. 5 f.
- 20) DC. II. 297.
- 21) DC. II. 453 ff.
- 22) SH. I. 515 ff, 535 ff.
- 23) DC. II. 549.
- 24) SH. II. 380.

第七節 『デイヴィッド・コパーフィールド』のローザ・ダートルと『借方と貸方』のロザリーエ・エーレンタール (Rosalie Ehrental)。

ローザ・ダートルはミセス・スティアフォースの社交仲間である。彼女の人生はジェームズ・スティアフォースに対しての報いられた短い愛、つまり諸々の限界を踏みこえた、身を焼き尽くすような、歪んだ情熱で満たされている。彼女は、スティアフォースがエムリーと知り合ってからスティアフォースに起った変化を鋭敏に感じとっている。彼女は、ジェームズが自分をもはや愛していないことを知っている。しかし彼女は彼をライバルに任せてしまうことができない。彼女は気付き、観察している。彼女はデイヴィッドを捜し出し、彼女の全存在と感情は情熱からのみ出来上っており、情熱に抗うことは不可能である。長い努力の後で彼女は、エムリーをロンドンで発見することに成功する。怒りと憎悪と激情がローザ・ダートルを残忍な粗暴さへと引きさらっていく。彼女はこの可哀想な、精神的にひどく苦しむ無防備な人間に、卑劣きわまりない非難と、破廉恥きわまりない罵りの言葉を投げかけるのである<sup>2)</sup>。

ロザリーエ・エーレンタールにあっては、ローザ・ダートルの諸特性が、その調子が和らげら

れているとは言え、再現されている。つまりフィンクに対するロザリーエの愛情と、ザビーネに対する憎しみの点において。フィンクの社交的で、堂々たる印象を与えるマナーにすっかり心を奪われて、ロザリーエは彼と一層親密な関係に入るが、その関係はアントンのたつての懇願と脅しで解消される<sup>3)</sup>。

その直ぐ後でシュレーターはザビーネや商会の店員達を連れてハイキングを企てる。

このハイキングで彼らはエーレンタール家の二人の女性に出遭う<sup>4)</sup>。アントンが丁寧に挨拶を交す一方、フィンクはユダヤ人の女性に殆んど注意を向けない。ロザリーエはしかしザビーネのみに注目する。「怒りと憎しみに満ちた燃えるような瞳」がザビーネに注がれる。ザビーネは「猛獣が襲いかかるのを避けるように」驚いて尻ごみをする。「ぎゅっと唇を噛みしめ、相手の容貌全体に対する口では表現できない反感をこめてロザリーエは憤然として通りすぎた。」ザビーネが自分の居間に入ってきたとき、このユダヤ女からの一通の手紙が差出される。その手紙で彼女にフィンクの行動が明るみに出る。「あなたの媚態で一人の殿方を惹きつけられたのです。この殿方は人を誘惑しそして忘れてしまうことに慣れてしています。その言葉に耳を傾けた女性を恥知らずな方法で取り扱うことにも慣れてしているのです。……この殿方はあなたにもおべっかを使い、あなたを裏切ることでしょう<sup>5)</sup>。」ローザ・ダートルの誹謗のように、ロザリーエの文面も印象を与えずにはおかない。

ロザリーエの人物像には加えて全く独創的なところがあるにも拘らず、ここでもまたイギリスの詩人のかすかな影響が見出されるといって差支えない。なんとなれば実際この人物像はフライタールによってまさに実物そっくりに描き出されたユダヤ人の典型に属するものだからである<sup>6)</sup>。

#### 第七節の注

- 1) DC. I. 533 ff.
- 2) DC. II. 352 ff.
- 3) vgl. oben S. 34 f.
- 4) SH. I. 302.
- 5) SH. I. 316.
- 6) vgl. oben S. 36.

#### 第八節 『デイヴィッド・コパーフィールド』のストロング博士 (Dr. Strong) と『借方と貸方』のベルンハルト・エーレンタール。

両小説には、自分の学問にすっかり没頭し、理想を追求し、世の中の営為から離れて書物とだけ交き合っている学者が登場する。

『デイヴィッド・コパーフィールド』では、カンタベリーの学校長のストロング博士である。後に彼は私的な生活に退いて、他人の妨げを避けて辞典の研究に専念することができる<sup>1)</sup>。彼は若い女性と結婚するが、彼女は持参金として多勢の貧しい身内の人間を連れてくる。この人達は

ストロングによって生活の保護を受けるのである。

『借方と貸方』で同一の理想的なタイプの人間を代表するのはエーレンタールである。彼は民間学者であり、善良で純粋な人間である。彼はその洗練さ、自然なままなところ、素朴さにおいて、また高い教養でもってエーレンタール家の他の人々とは著しく対照的である<sup>2)</sup>。彼はアントンの友情が与えられ、またレノーレに対する熱い情熱が高い幸福をもたらすと同時に<sup>3)</sup>、そのことが彼の夭折を加速するまで、その書斎で孤独に暮している。

#### 第八節の注

- 1) DC. I. 295 ff, 345 ff., II. 107 ff.
- 2) vgl. oben S. 33 und 36.
- 3) SH. I. 346 ff.

#### 第九節 『ニコラス・ニクルビー』のティム・リンキンウォーター (Tim Linkinwater) と『借方と貸方』のシュレーター商会の帳場係の人々。

我々はまた『借方と貸方』の大いにユーモラスに描かれた事務所に働く人物達のお手本を『ニコラス・ニクルビー』の中に見出すことができる。ヴォールゲムート (Wohlgemuth) 兄弟商会 (訳者注：英語原文では Cheeryble, ヴォールゲムートはその直訳独語) の帳簿係のティム・リンキンウォーターこそはシュレーター商会の帳場係のすぐれた特徴をあわせ持っている。

ティムはリーボルト (Liebold) 同様ガラスの仕切りの中で仕事をしている<sup>1)</sup>。リーボルトは第二帳場の窓際で「孤独な尊厳さ示し、神秘的な活動ぶり」で仕事に没頭している。ティムの方もまた出納係としての職務で鉄製の小型金庫と金庫の保管をしているプルツェル (Purzel)<sup>2)</sup>とも似ている。ティム・リンキンウォーターは帳簿係でありまた同時に出納係でもある。彼はリーボルト同様几帳面かつ勤勉に数字を大きな元帳に書き込み、いじらしいほどの自尊心をいだききれいな文字の書き込みを新参者のニコラスに見せてやる<sup>3)</sup>。同様にリーボルトは、自分の金額を書き込むときには<sup>4)</sup>、「美しい筆蹟の特徴」を眺めて喜んでいる。プルツェル同様<sup>5)</sup>ティム・リンキンウォーターは几帳面そのものである<sup>6)</sup>。毎朝丁度9時に彼は金庫の蓋をあけ、毎晩10時半に彼は、全ての扉がきちんと閉まっているかどうかを確認する。

ティムのガラス仕切りの中には紙、ペン、インク、定規、封蠟その他のものが「所狭しと置かれている<sup>7)</sup>。」プルツェルにあっても同様全てのものが「不動の位置を占めている。主イエス、商会、大きな金庫、長蠟そく、封印が。」毎朝プルツェルは仕事を始めるに当たり、テーブルの上に描いた白い点で売掛金の割り振りをする<sup>8)</sup>。ティムは商売の利益をおもんばかって頑固なところがある。彼の良い上司たちが、毎日もう一時間労働時間を減らし、また休暇のときみたいに時々田舎に出かけることを勧めると、ティムは立腹し、力をこめて、「過度の要求」を拒ける<sup>9)</sup>。我々はその際に、家全体に自分の支配権を及ぼそうとするピックス (Pix) を思い出す。彼はアン

トンに、パイプ煙草を物干場にもってくるように命じ、シュレーター伯母が異議申立てをしたにも拘らず、後に退かない。店主に対しても彼は、ティムと全く同じで、大変な頑固さを示して自分の見解を主張する<sup>10)</sup>。

ティム・リンキンウォーターの居間は商館の中はあって、その窓から中庭の眺めが利くが、ティムは他のどんな眺めよりもそれが好きである。窓敷居には永年丹精したモクセイ草の植木鉢が置いてあり、その鉢の両側には四個の植木鉢がある<sup>11)</sup>。シュレーター商会の帳場系の部屋も似たような状況にある。部屋は建物の裏側にあつて、窓の正面は中庭に向いている<sup>12)</sup>。我々はここでもまた再び花の栽培にお目にかかる。そしてシュペヒト (Specht) の見事な豆と西洋カボチャの葉っぱのことを思い出す<sup>13)</sup>。

ティム・リンキンウォーターは自分の誕生日にきまって店主のところで昼食をとる。彼の名誉のためにダブル・ダイヤモンド (Doppeldiamant) が飲まれ、ネッド・ヴォールゲムート (Ned Wohlgemuth) は次のような短い挨拶の言葉をかけて 忠実な傭人を褒めそやす。「さあ諸君諸君の最良の友ティモシー・リンキンウォーターの健康を祝して飲もう。そして彼の健康と長寿を願ひ、またこの誕生日がさらにいく度も愉快地朗らかに経めぐってくること、彼自身と、また彼をいくら尊敬しても足りない宝物と見做している諸君らの年老いた雇主のために、健康と長寿を希望します<sup>14)</sup>。」リーボルト氏も同様シュレーター氏の夕食の場で祝ってもらい、店主の挨拶の言葉で顕彰されるのである。その挨拶で彼の功績が評価される。「もし私が帳場の全ての仲間の感謝の気持ちを述べねばならないのなら、あなたこそ最大の感謝をうけるべきなのです。25年間職務にあり、10年間元帳係をつとめ、常に忠実で、頼り甲斐のある店員でした<sup>15)</sup>。」

ティム・リンキンウォーターは独りぼっちの生活に疲れている。そして彼はもはや最年少でないにも拘らず、小柄で、陽気で、青春の花盛りをすぎているミス・ラ・グリーヴィ (La Greevy) と結婚するが、彼女と彼はいつもうまく話し合ってきたのである<sup>16)</sup>。ピクスとシュペヒトも独身生活に倦んでいる。ピクスは財産のある未亡人と、シュペヒトは未亡人の姪と結婚する<sup>17)</sup>。

#### 第九節の注

- 1) Nich. N. II. 35.
- 2) SH. I. 85 f.
- 3) Nich. N. II. 58.
- 4) SH. I. 309.
- 5) SH. I. 85.
- 6) Nich. N. II. 40.
- 7) Nich. N. II. 57.
- 8) SH. I. 85 f.
- 9) Nich. N. II. 38, 40.
- 10) SH. I. 88 f.
- 11) Nich. N. II. 40. 108.
- 12) SH. I. 42 f.

- 13) SH. I. 499 ff.
- 14) Nich. N. II. 62 ff.
- 15) SH. I. 315.
- 16) Nich. N. II. 437 ff.
- 17) SH. II. 100. 358.

第十節 『デイヴィッド・コパーフィールド』のペゴティー (Peggotty) 氏、  
バーキス (Barkis) 氏と『借方と貸方』の仲仕シュトゥルム (Sturm)

『借方と貸方』のもう一人の脇役を『デイヴィッド・コパーフィールド』中の脇役と対比することができよう。仲仕のシュトゥルムは我々に明確に漁夫のペゴティーを想起させる。双方とも力自慢の人である。シュトゥルムは将来には最強の人間となる筈だ<sup>1)</sup>。ペゴティーは強靱なオットセイとして広く遠く知られており、人々が彼の太っ腹さ加減を語るときだけ気性が激する。あるときなど彼はそのためにとっしりとした机を握りこぶして粉々に砕いてしまったほどだ<sup>2)</sup>。我々はこの実直な漁夫が従弟と一緒にハム・デイヴィッド (Ham David) を学校に訪ね、蟹の包をハムに手渡すさまを目のあたりにする。またそれと同時に、シュトゥルムと彼の息子がアントンに寄せる誠実さ、また彼ら二人がアントンに対して行なう奉仕を我々は考える。ペゴティーは好意的かつ控え目にスティアフォースを自分の質素な家に招待するが、そうすることでどんな不幸を惹きおこすか、また彼の信用がどのように悪用されるか、露ほども知らない。同じく際限のない善意をもってシュトゥルムは若いロートザッテル男爵に1900ターラーの金を貸すのであるが、そのロートザッテルの信用はすっかり失われている<sup>3)</sup>。老人はその金をためらうことなく支払ってやる。彼は将校の信用によって自分が尊敬されたと思い、中尉である男爵が彼の家に足を踏み入れたことを誇りに感じている。ペゴティーも同様にスティアフォースを迎えることが大変な名誉だと見做している<sup>4)</sup>。

大男のゆとりのない小さな清潔な家<sup>5)</sup>もまた我々にペゴティーのピカピカに磨き上げられた漁師の住居を想起させる。この家は使い古して陸地に引き上げられたボートでできている<sup>6)</sup>。

ペゴティーにおいて我々は、二人の父親は溺死してしまっている彼の甥と姪に対する感動的な愛情をみるが、シュトゥルムの場合には彼の息子に対する濃やかな愛情を見出すことができる。エムリーがスティアフォースと逃亡するとき、ペゴティーは自分の家庭を棄て、数年間にわたって、姪を探し出すために、イングランドと外国を隅なくさまよう<sup>7)</sup>。とうとう姪を発見し、彼女や他の友人らと一緒にオーストラリアに移住していく。そこで彼らは牧歌的で勤勉な植民地開拓者の生活を送る<sup>8)</sup>。カール・シュトゥルム (Karl Sturm) は父の許を去り、営農家になる。今や年老いた仲仕は仕事から解放されて孤独な惨めな境遇になってしまう<sup>9)</sup>。彼は、自分の体力がきつい仲仕の仕事や、樽詰ビールの飲みすぎで50歳にして衰えていかざるをえず、また自分の死期がせまったという盲信に益々とじこもってしまう。折よくカールは自分の父を田舎にひきとり、

そこで父は有害な盲信からのがれ、人生最後の時を息子の傍らで満足して過ごすことになる<sup>10)</sup>。

#### 第十節の注

- 1) SH. I. 91.
- 2) DC. I. 43.
- 3) SH. II. 80 ff.
- 4) DC. I. 386 ff.
- 5) SH. I. 262.
- 6) DC. I. 38 f.
- 7) DC. II. 23 ff, 183 ff.
- 8) DC. II. 359 ff.
- 9) SH. II. 80 f.
- 10) SH. 360 ff.

### 第三節 ディケンズとフライタークの小説作法の類似

#### 第一節 ストーリーの構成（『デイヴィッド・コパーフィールド』と『借方と貸方』）

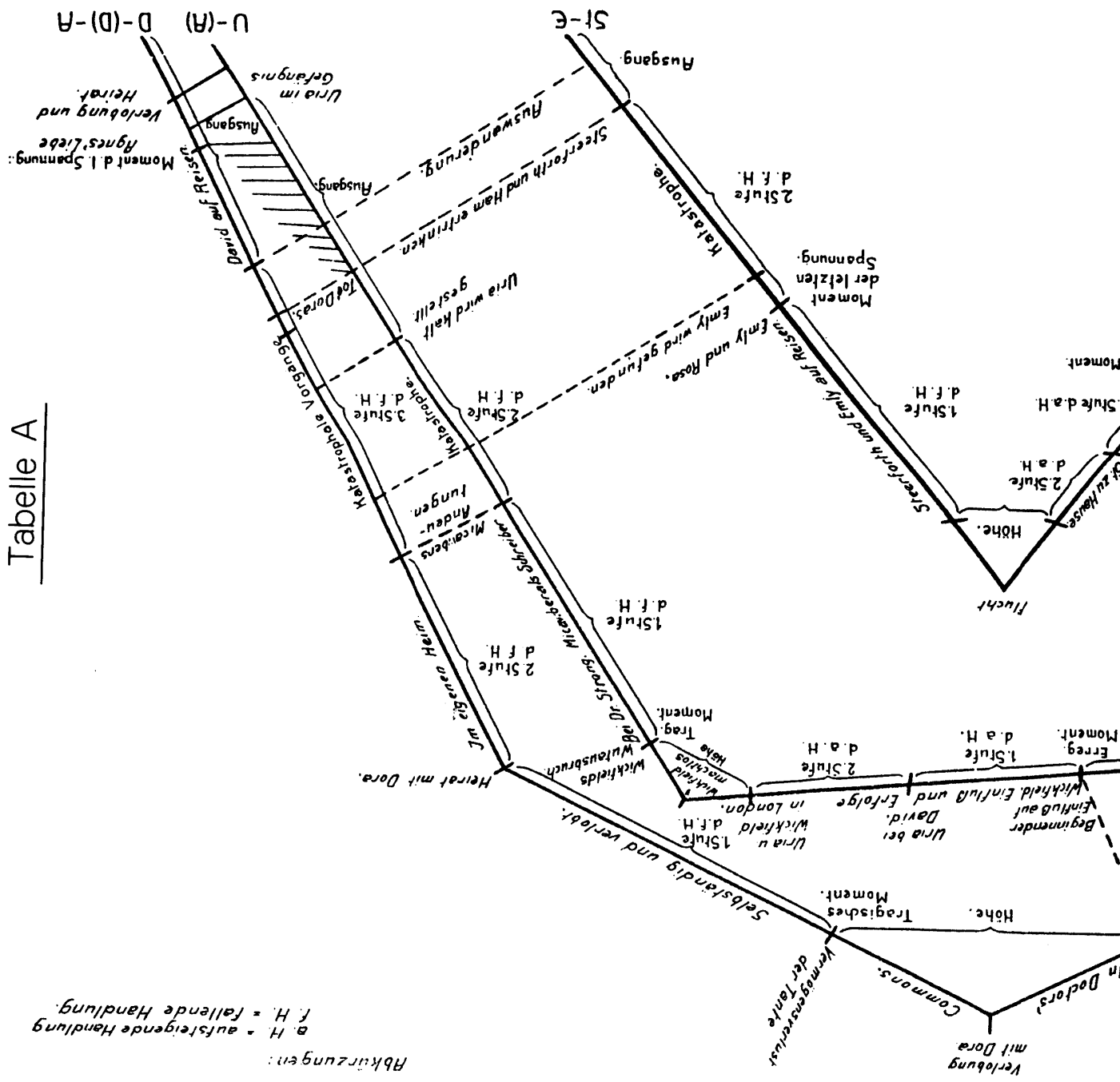
##### 図表Aの注釈

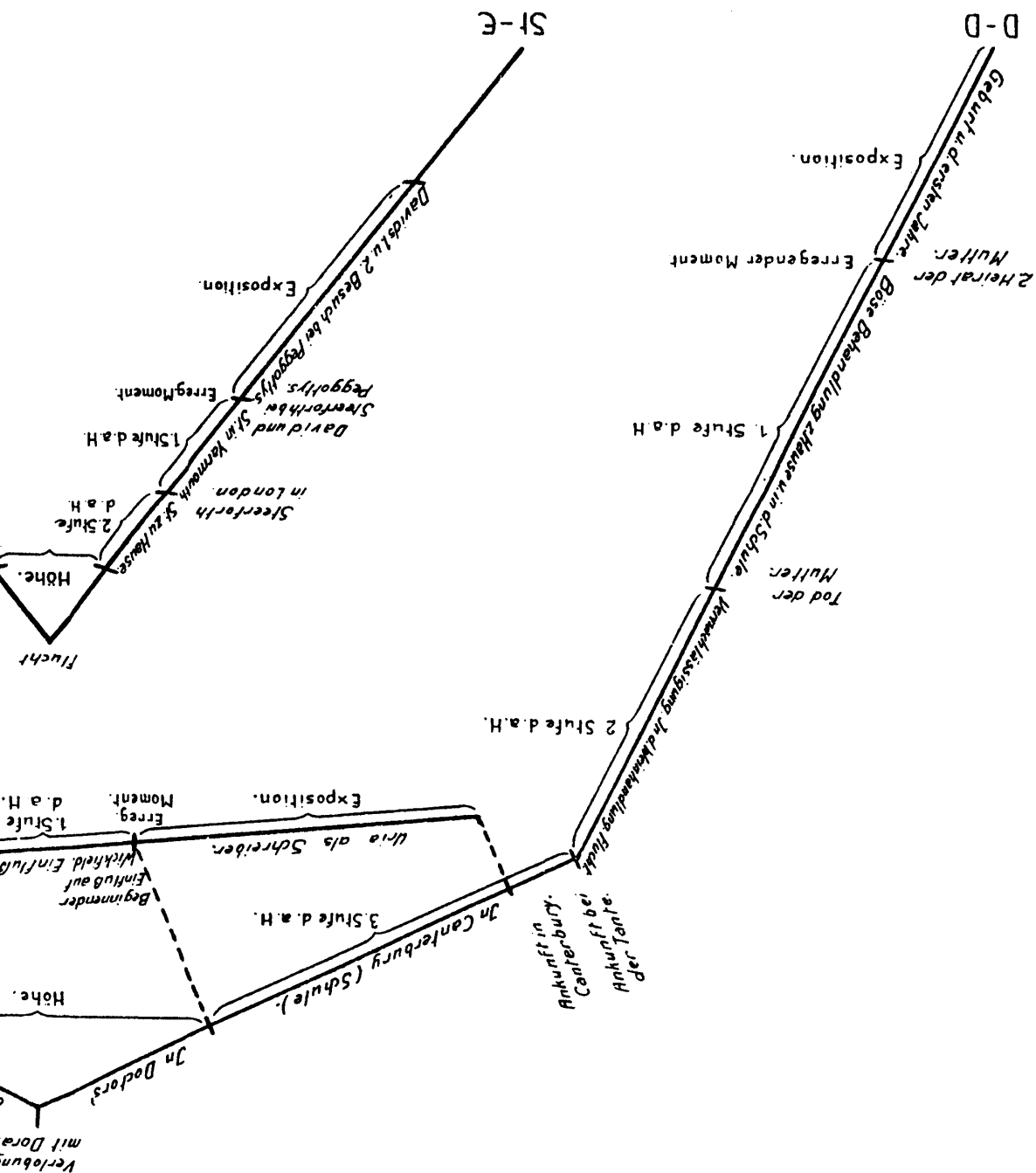
線D—Dはデイヴィッドとドーラのストーリーの個々の局面<sup>1)</sup>を追跡している。またU—Aはユライアとアグネスのストーリーを、St—Eはスティアフォースとエムリのストーリーをたどっている。勿論U—AとSt—Eとは常にD—Dと関りがある。上昇中のデイヴィッドのストーリーの最初の二つの段階にあってはマードストーン（Murdstone）兄妹が敵役を演じている。この敵役はデイヴィッドのストーリーに入り込んでいるが、そのために特に図表で描写されてはいない。第三段階の開始と共に敵役は動きを止め、新しい敵役（ユライア）にとって代る。上昇中のデイヴィッドのストーリーの第三段階はU—Aストーリーの提示部と関係してくる。このことを私は点線で印した。同様に図表右側には破局的事件の連続の際の個々のストーリーの関係が点線で描出されている。ドーラの死後、前もってユライアのストーリーに入り込んだアグネスのストーリーがデイヴィッドのストーリーと融合する。それ故に私は右下に二本線の間空間に細かい平行線を付し、これを私はD—(D)—AとU—(A)で示した。

##### 図表Bの注釈

ここで私はアントンのストーリーをAと、ファイテルのストーリーをVと、フィソンのストーリーをFと区別し、さらに点線で際立たせて、レノーレのストーリーをLと、ザビーネのストーリーとを区別した。レノーレのストーリーはアントンのストーリーの下降の第二段階までアントンのストーリーと平行し、または密接に結びついて展開していく。それからレノーレのスト

Tabelle A



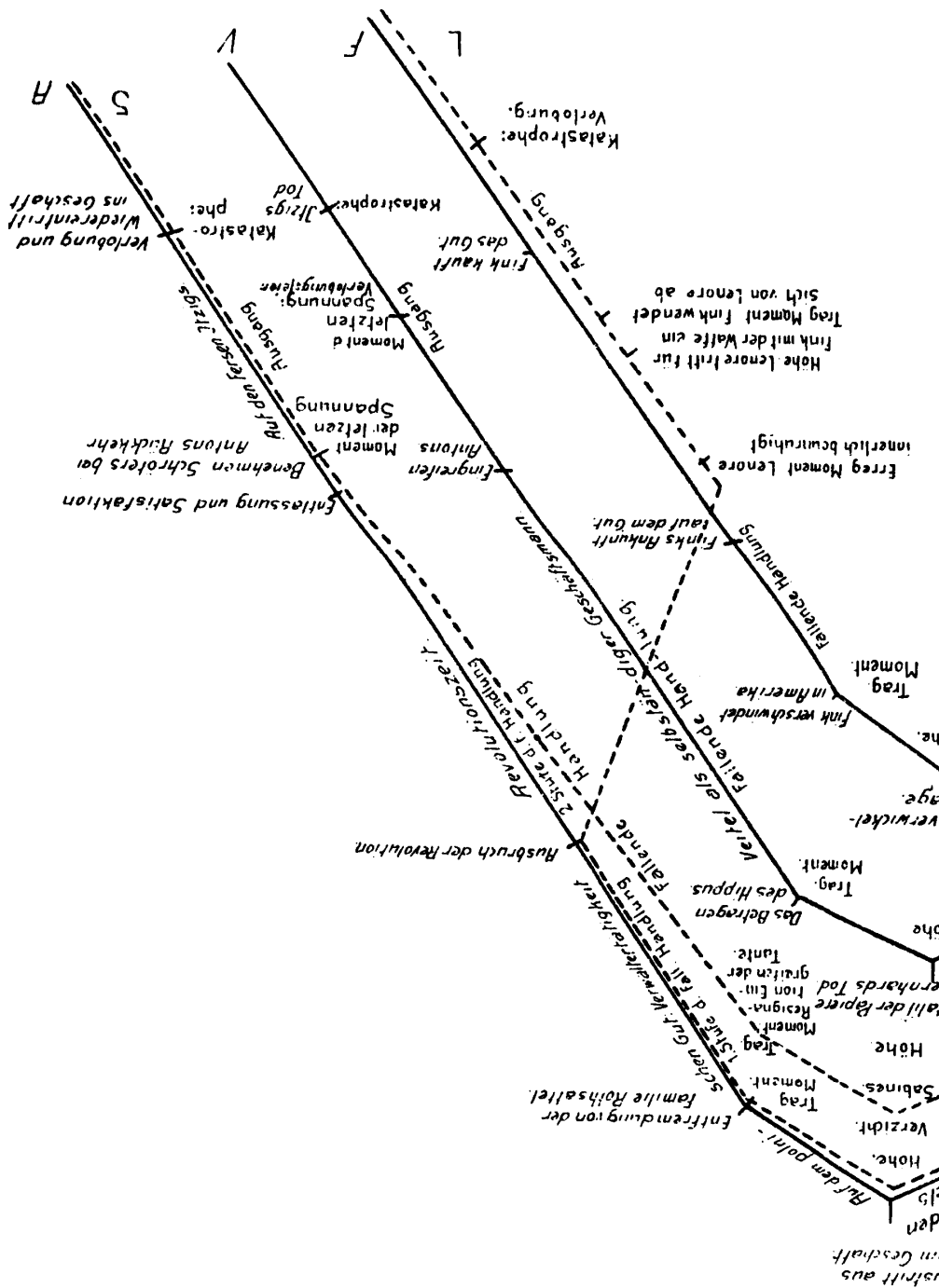


Graphische Darstellung der Einzelhandlungen in David

Copperfield"



Tabelle B





ーリーはフィンクのストーリーに転ずる。同様にザビーネのストーリーはしばらくの間フィンクのストーリーと平行して展開する。その後ザビーネのストーリーは益々アントンのストーリーに接近していく。フィンクに対するザビーネの愛と、フィンクに対するレノーレの愛は、図表から見てとれるように、それ自体で一つの独立したロマンを形づくっている。この小説作法の表示はラテン体（古体）で、小説の内容の注釈はイタリック体で印刷されている。点線のための記載は一層精確な区別をするために完全なラテン体で再現されている<sup>2)</sup>。

フライタークは卓越した小説のテクニシャン (der Romantechniker κατ' ἐξοχήν.) である。正確に決められた規則に従ってストーリーを構成することが彼の心底からの要求であった。ウルリヒ (Ulrich) はこのことをその著書の中で詳細に叙述している。しかし彼は——それについては既に上で触れている<sup>3)</sup>——常にスコットをフライタークの作法のお手本として挙げている。フライタークがこの点に関してディケンズに刺激を見出していた、ということは非常に可能性の高いことであると私は見做している。なぜならディケンズの小説は、しばしば想像されるほど非有機的だという訳ではない。勿論彼の小説はその冗長さと、いとも容易に脇道に逸れ込む空想力故に、フライタークの小説ほど統一性がない。さらに、ディケンズがその小説を断片的に雑誌に発表したことは、彼の芸術を損ねている。そういう点をフライタークはそもそも非難しているのであるが、とくにディケンズにおいて厳しく咎め立てしている<sup>4)</sup>。またディケンズは自分の小説を章毎に分けているが、一方フライタークは一群の章を一冊の本にまとめている。五ないし六冊のこういう書物がドラマの一つの幕に似て、小説を形づくっている。

ところで我々は、ディケンズとフライタークがどのようにしてすぐれた作法の基本的要請を充足したかを比較してみよう。そうすれば我々はここでもまた同じような処理方法を確認することができよう。フライタークはいくつかの基本原則をうち出しているが、それは、ドラマや長編小説のまとまりのある構成を目指すために従わなくてはならぬものである<sup>5)</sup>。フライタークは要求する。第一に「開幕の場面では、ドラマもしくはロマンの基本を見渡せるように、不可欠な前提が与えられていなくてはならない。」このような要請にディケンズはいかなる対応を示すか？フライターク同様ディケンズは、前史をきわめて明白に描き出すために多大な入念さをはらう。フライタークはこの点で確かにディケンズから学んだということが出来る。フライタークが彼のロマンの前史にとりかかる際にみせた快適な間口の広さは、ディケンズの影響をうけた前提条件の詳細な処理方法をありありと想起させてくれる。導入部の規模はフライタークにあってはディケンズにおける場合よりも比較的大きくとられている。フライタークがたとえばその前提部においてすでに政治的、社会的境遇の現状を描写している一方、ディケンズはこの問題を彼の小説の後半部の展開の中でやっ取り組み、しかもさしあたりかなり詳しい事情に考慮をはらうのみ

である。いずれにしろこの二人の詩人にとって前提条件それ自体が一個の完結した全体、一つの短編小説を形成することができる<sup>69</sup>。先ず刺激的要因によって主人公達はこれまで平静に進行していたストーリーから突然別な状況に移しかえられ、脱線させられる。それによってフライタークの第二の基本的要請が満たされる。その要請は次のとおりである。「波乱に富んだストーリーの開始は不可欠な導入部から力強く、くっきりと対照を示さなくてはならない。」刺激的要因はつまり明瞭に目立たせられていなくてはならない。ディケンズとフライタークにはこのことが当てはまる。こうして『デイヴィッド・コパーフィールド』では幼ないデイヴィッドの置かれた立場は彼の母の二度目の結婚により完全に变化してしまう。再婚前には彼に不足しているものは何一つない。彼は愛されており、甘やかされていた。彼はまだ海辺で素敵な日々をすごしていた。そして今や帰郷のさいに、突然万事が変ってしまった<sup>70</sup>。あるいはまたスティアフォース＝エムリーのストーリーにおける刺激的要素である。ボートの家での安定した牧歌的生活はスティアフォースの到着で妨げられてしまう。エムリーは静寂な状況から駆り立てられてしまう。彼女はスティアフォースに手向うことはできず、ハム(Ham)との婚約すらもが支えにならない<sup>81</sup>。さらにもう一つ『借方と貸方』の一例をあげよう。アントンを貴族の世界に案内したことがアントンのストーリーの刺激的要因を形成している。アントンもまた単調な商業生活から揺り起される<sup>91</sup>。

ディケンズ並びにフライタークにおいて我々は刺激的要因の進入に対して心構えができています。それで我々は、デイヴィッドの母へのミスタ・マードストンの接近が子供に幸福をもたらさないことを感じとっている<sup>101</sup>。同様に我々は、ロートザッテル家の庭園でのアントンの体験がストーリーのその後の進行に意味があることを感じている<sup>111</sup>。

ディケンズは絶えず記述をストーリーに置き換えようと努めている。『借方と貸方』の第一章が記述的に完全に控え目である一方、『デイヴィッド・コパーフィールド』ではすでに、主人公の誕生以前と誕生時の諸シーンがストーリーによって描出されている<sup>121</sup>。

イギリスとドイツの長編小説では上昇的ストーリーと下降的ストーリーの段階が容易に認められる(図表参照のこと)。その際イギリスの小説の主要なストーリーがいかに規則正しく構成されているかということが我々の注目を惹く。各々の段階が主人公を別な生活状態に連れていく。主要な区切りは<sup>131</sup>、上昇ストーリーの第三段階、下降ストーリーの第二段階の開始により惹き起される。『借方と貸方』ではロートザッテル家とシュレーター家に対するアントンの関係が、上昇的又は下降的ストーリーの諸段階によって叙述されている。上昇の第一段階の経過中にアントンは舞踏会のレッスンに参加し、職業的義務はもはや前面には出てこない。第二段階の経過中にアントンはポーランドでオイゲン・フォン・ロートザッテルと友好関係に入る。彼はしかしまた商人としての実を示し、彼の主人とザビーネに個人的に接近する。クライマックスはこの商館からのアントンの離脱である。彼はすっかりロートザッテル家に向きを転じてしまう。しかし下降的ストーリーの経過中に彼はロートザッテル家から疎遠になり、ついにはシュレーター商会に戻

っていく。そこで彼は永続的な自分の故郷を再発見する。

我々はクライマックスの扱い方にとりかかろう。フライタークはクライマックスを注意深く際立たせることをディケンズよりも一層重要視している<sup>14)</sup>。『デイヴィッド・コパーフィールド』では主要ストーリーのクライマックスはスティアフォース＝エムリーのストーリーのそれと一致している。一方対立するストーリーはまだ上昇中である<sup>15)</sup>。『借方と貸方』の過度に規則正しい構造では事情が違っている。ここではあらゆるストーリーが殆んど同時にクライマックスに到達する。勿論対立する（ファイテルの）ストーリーのクライマックスは主要ストーリー（アントンの）のクライマックスを前提としている<sup>16)</sup>。

両長編小説において決定的に悲劇的な要因は欠けてはいない。この要因はストーリーの方向転換をもたらす。『デイヴィッド・コパーフィールド』では主人公はその伯母の財産喪失後今や完全に自分自身が頼りである。『借方と貸方』では男爵一家がポーランドの領地に到着するとともにアントンとロートザッテル家との疎隔が始まる。両長編小説のその他のストーリーの悲劇的要因は図表から簡単に見てとれる。

このイギリスの長編小説の下降的ストーリーの第三段階は諸々の破滅的事件をもたらす。エムリーは発見され、ユライアは正体を暴かれ、ドーラは死に、スティアフォースとハムは大波にのまれて死亡する<sup>17)</sup>。この連続して起る事件の夥しさは殆んど圧倒的な効果をあげているが、特にディケンズに物語の主要モチーフを一箇所にたぐり寄せる能力がなかったからである。フライタークの作法はこの点でディケンズのそれをはるかに凌いでいる。『借方と貸方』の対立するストーリーのクライマックスを比較していただきたい。この作品では続けざまに事件が進行していく。つまり臨終のベルンハルトの病床のシーン、一方ではヒップス (Hippus) は帳場の有価証券を盗む、ベルンハルトの死、男爵の自殺未遂があり、エーレントールは正気を失う。

両作者は上昇的なドラマチックな動きの後でストーリーを一層落ち着いた軌道にのせる必要を感じている。彼らは新しい事態に目を向ける。「自然は人間の心にとって至るところで治癒力をひそめている<sup>18)</sup>。」というリンダウ (Lindau) の名言は、荒廃したポーランドではつらつとかつエネルギーに仕事にとりかかるアントンに相応しいだけでなく、スイスの山中で興奮状態から正気にかえり、作家としての活動に没頭するコパーフィールドにも当てはまる。

ディケンズとフライタークは読者の興味を結末において再び高めることを忘れてはいない。つまり最後の緊張という要素を用いるのである。そういう訳でデイヴィッドはアグネスの心が既に決まっていることを感じている。そのことはまた彼の伯母によっても確認される。いずれにしろデイヴィッドがやっと自分がアグネスの愛の対象であることに気づくまで長い時間がかかる<sup>19)</sup>。『借方と貸方』では、余りにも冷淡で不親切な商人のアントンに対する応接が我々をおどろかす。それは理解し難いものだ<sup>20)</sup>。しかしここでもまた萬事が好転する。

フライタークの第三の、最後の基本的要請は次のとおりである。「ストーリーの結末は全体の

進行のあまねく理解される結果として現われなくてはならぬ<sup>21)</sup>」フライタークの長編小説のストーリーが結末に至るまでいかにまとまりよく展開しているかは周知のことである。各々の出来事は入念に動機づけがされている。しかしこの点でディケンズもまた非難することはできない。ディケンズの長編小説では個々のエピソードの並列は内的な原因となる脈絡を踏えており、その結末は全体的なストーリーの理性的な成果である。

### 第一節の注

- 1) 提示部, 上昇的ストーリー, クライマックス, 下降的ストーリー, 結末・
- 2) 私の論文を完成した後でようやく私は Th. Zielinski の『古代ギリシャ・ローマの叙事詩における同時発生事件の処理』(Die Behandlung gleichzeitiger Ereignisse im antiken Epos. "Philologus", Suppl.-Bd. VIII., 3. Heft: auch Sonderabdruck, Leipzig 1901) を見ることができた。ここにはストーリーの推移が図表でも呈示されている。
- 3) 同上書13頁参照, 私の研究のこの章のためにウルリヒの卓越した論文によって特別な刺激が与えられた。
- 4) vgl. Erinn., S. 202.
- 5) vgl. Ulrich, S. 44. und Erinn., S. 179.
- 6) So z. B. in "David Copperfield" and "Nichlas Nickleby", "Soll und Haben" und der "Verlorene Handschrift".
- 7) DC. I. 54 ff.
- 8) s. o. und DC. I. 385 ff.
- 9) SH. I. 136 ff.
- 10) DC. I. 24 ff.
- 11) SH. I. 16 ff.
- 12) vgl. oben S. 8.
- 13) 悲劇的要因の連続は別として
- 14) Erinn. 180.
- 15) vgl. die Tabellen!
- 16) さらにこれらの事件の続きは: ペゴティ, エムリーとミコウバーは外国に移住する。ミセス・ステファースは精神錯乱に陥る。DC. II. 353-472.
- 17) SH. I. 534 ff.
- 18) Lindau, S. 168.
- 19) DC. II. 501 ff und 527 ff.
- 20) SH. II. 311 ff.
- 21) s. o. S. 85 Anm. 1.

### 第二節 対比的人物, 対比的ストーリーと平行的ストーリー。

『わが生涯の思い出』<sup>1)</sup>の中でフライタークは小説に登場する人物の案出について語っている。それら人物というのは固有な重圧の下で産み出されたのである。「というのは、人間の目には各々の色彩がその特有な補色をおびき出すように、創造的な心の中でも好きになった人物はそれと対比的な人物を駆り立ててくるものである<sup>2)</sup>。」特にこの問題、つまり対比(照)物の描出について、さらには『借方と貸方』の構想と構成全体について、ベルンハルト・ゾイフェルト (Bernhard

Seuffert) がその論文『詩的構成についての考察. I.』<sup>3)</sup>の中で取り扱っている。その啓発的な図表は我々に小説の組立て、個々の登場人物と登場人物群相互の行動並びに登場人物の対比を実例付で説してくれる。ゾイフェルトは模範的少年アントンと悪人イッツィヒを対比させている。またアントンとフィンク、ロートザッテル一家、シュレーターとエーレンタールを比較している。ゾイフェルトの観察方法によってこの小説の図式が著しく強調される。一方このようなものとしてのこの芸術作品は、確かに既に生じたままで多くの人々の眼中に紛れ込んでいかざるを得ない<sup>4)</sup>。『借方と貸方』には旺盛な活力が欠けているということ、またこの小説に色々な考えの寄せ集めという印象が甚しいという批評は正しいかも知れない。にも拘らずゾイフェルトはこの「余りにも賢い建築家が作り上げた枠組み家屋<sup>5)</sup>」が選りすぐった構成のみならず、均衡状態の本能的欲求の上に成立しているということ、またフライタークのこの「図式的」創造が、もしそう名付けてよいものなら、大部分は無意識的なものと承認している。このことは、フライタークが『回想』の中で述べていることと一致している<sup>6)</sup>。つまり「対立の形をとったこの創作は思慮分別の結果として生まれたものではなく、物理的必然から全く独りで生まれてきた。それは人間感情の要求に従って仕上げられた出来事の中に人間世界全体の似姿を小規模に表現しようという創造的エネルギーの努力に基づいている。」それでは対比物の形を借りた無意識的創造を「技巧<sup>7)</sup>」とのみ称してよいものだろうか？ この点については論議の余地がある。フライタークがもっと豊かな、もっと独創的な想像力を持っていたなら、洗練されて、きわめて入念な構成は人目につかぬであろう。ついでながら言うと、この構成はゾイフェルトの叙述にみられるほど不快ではない。

ディケンズの物語も対比的人物に富んでいる<sup>8)</sup>。平行ストーリー、対比的ストーリーがひんぱんに、かなり多くの小説の目の粗い構成が予想させるより、はるかに用意周到に実行されている。いずれにせよ我々は、ゾイフェルトが『借方と貸方』で試みたのと同じやり方で、成功しているのを観察することができる。私はこれを『デイヴィッド・コパーフィールド』で若干の図表を用いて試みてみたい。

次の図表 I から我々は、デイヴィッドが中心になっていて、かつ全ての主要人物がデイヴィッドと関係していることをはっきりと見てとる。更に左側には、愛情のこもった女教師、対比物そのもの、デイヴィッドの伯母と母が、右側には無慈悲な継父とその妹、厳しいミス・マードストーン。左側には再びデイヴィッドに協力的で、真面目なガールフレンドのアグネス、つまり後に彼の二度目の妻となる人物。その彼女と対照的に魅力的な稚な妻ドーラ、すなわちデイヴィッドに子供じみた愛情をいただいているが、明白に利己的な要求をするデイヴィッドの最初の妻である。二人の父親であるヴィックフィールドとスペンロウ (Spenslow) は対立する人物ではない。彼らの干渉を我々は平行的ストーリーと見做すことができる。アグネスはミセス・トロットウッドに目をかけられる、ドーラはミス・マードストーンを教師に雇う。ドーラの父の死後彼女のおば達は

ミス・マードストンの地位を占める。このおば達、ミス・クラリッサ (Miss Clarissa) とやさしいオールドミス的な性質のミス・ラヴィニア・スペンロウ (Miss Lavinia Spenlow) は再びデイヴィッドの伯母つまりエネルギッシュで活動的なミセス・トロットウッドと激しく対立する。アグネスを手に入れようと努めた赤毛のユライア・ヒープを我々はドーラと馬車のドライブの途次デイヴィッドの嫉妬心を駆り立てた「赤ひげの紳士」と対比した。ユライアとの対比的存在は多分デイヴィッド自身である。図表の下の部分是我々にスティアフォースのストーリーを示してくれる。スティアフォースとハムは大きな対比を示している。

Tabelle I.

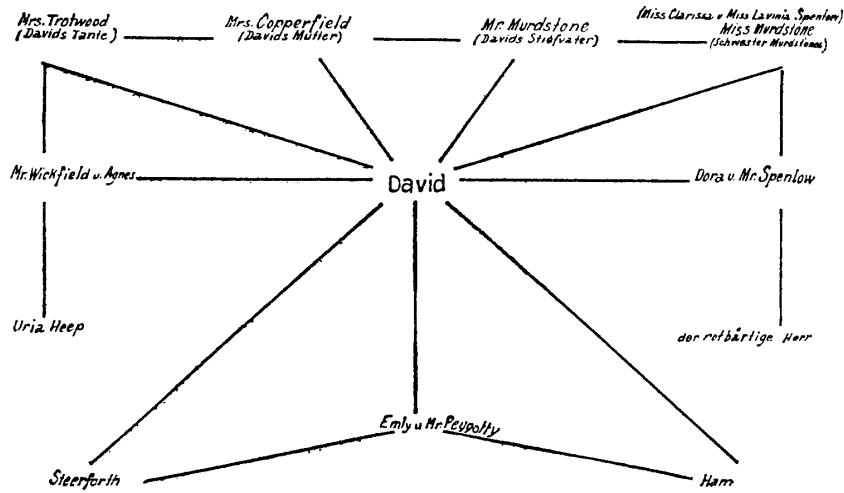
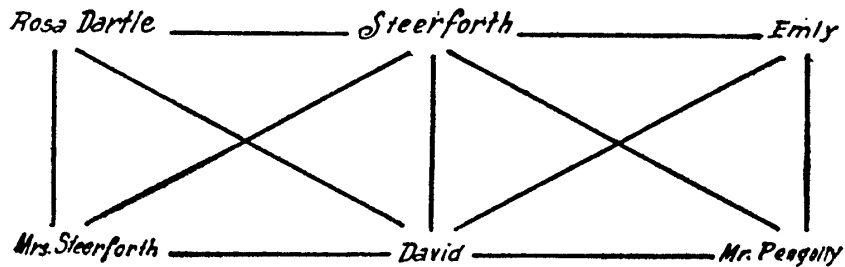


Tabelle II.

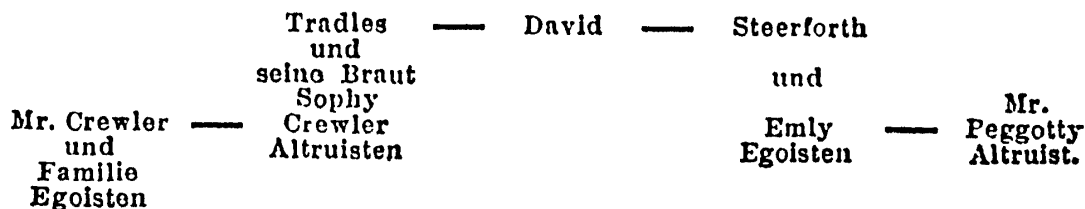


図表II中の主要人物はスティアフォースとデイヴィッドである。二人は友人であり、対照的存在である。デイヴィッドは仲介者の役割を演じている。彼はミセス・スティアフォースの許に滞在し、ミスタ・ペゴティーを訪問中である。彼はローザとエムリーに関心を示す。スティアフォースは彼の母の家とペゴティー家に不幸をもたらす。彼はローザとエムリーを愛しかつはねつける。デイヴィッドは当事者全員を慰め、また宥めようと努力する。際立った対比的人物は一方ではローザとエムリーであり、他方ではミセス・スティアフォースとミスタ・ペゴティーである。ローザはデモニッシュな情熱家タイプで、エネルギッシュで、人から拒絶されるほど気むずかし屋である。また嫉妬深く執念深い。エムリーは献身的な愛に生々と輝き、無定見で、弱くて依



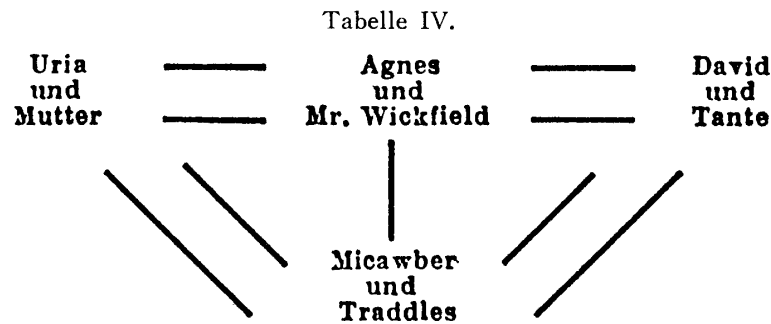
存心があり、気むずかしいところはなく、スティアフォースが彼女を棄てたとき、不幸な思いをするだけ、内面的にはすっかり参っている。執念深さは彼女のあずかり知らぬところである。外面的にもこの二人の女性は対照的である。つまりローザは黒っぽい髪で顔立ちは鋭い。エムリーは金髪碧眼おだやかな美人である。ローザはスティアフォースの母の面倒を見てやる。この母は明白に利己的な愛情をもって息子に執着しているが、その息子が折悪しくエムリーとの関係を断って戻ってくると、彼を突き離してしまう。この彼女と対照的なのはミスタ・ペゴティーである。彼はエムリーの養父であり、心底からの親切さと真に利他的な愛情から自分の家族の幸福を願い、自身のことは考えない。彼は自分の養女に平和を得させてやるために、諸国をめぐり。この二組の宥和不能な対立者が対峙する古典的なシーン<sup>9)</sup>にミセス・スティアフォースの間違った高慢さとミスタ・ペゴティーの本当の誇りが現われている。

Tabelle III.



図表Ⅲもまたエゴイズムと利他主義の対立を具体的に示している。スティアフォースとトラッドルス (Traddles) はデイヴィッドの学校仲間である。トラッドルスはいつも忍耐強く、善意である。彼は全てのことをこの上もない無欲さで耐えている。スティアフォースは尊大で、自負心があり、我慢することができない。トラッドルスは長年にわたり婚約しており、誠実な愛情をいだいて花嫁のソフィー (Sophy) を愛している。スティアフォースはしばらくするとエムリーをすげなく拒けてしまう。ソフィーは自分の両親の面倒を見、彼女が居なくてはまるでやっけない弟妹たちを育てている。ハムと婚約しているながら自分の家族を棄ててしまうエムリーとは対照的である。ソフィーがトラッドルスと婚約したとき、彼女の父はご気嫌斜めである。彼女の母は人事不省に陥入り、姉妹達は茫然自失の態である。全ての人が彼女なしですまそうと思いつながらそれができない<sup>10)</sup>。やっとならばトラッドルスとソフィーは結婚することができる。今やクルーラー (Crewler) 一家全員が彼らのところに引越してくる。しかしトラッドルスはそれを喜んでいだけである<sup>11)</sup>。それと対照的なのはスティアフォースのペゴティー一家に対する振舞いである。クルーラー一家と対照的なのはミスタ・ペゴティーである。彼は既に上で特徴を述べたような流儀で純粋な利他主義者である<sup>12)</sup>。

図表Ⅳはアグネスのストーリーを描出している。対照的なのはアグネスをめぐる二人の求婚者ユライアとデイヴィッドである。原動力となる要因は、息子と生き写しのユライアの母親であり、彼女はアグネスを自分の息子のために手中に収めようと努める。もう一人はデイヴィッドの伯母



のミセス・トロットウッドである。彼女は自分の甥と彼女のお気に入りのアグネスの幸せを招来しようと切望する。この二人のエネルギーな婦人と対照をなすのは活気のない、無気力なミスタ・ヴィックフィールドである。ミコーバー (Micawber) とトラッドルスはユライアと関係がある。彼らはこの悪人の仮面を暴く。ミスタ・ミコーバーはここでは調停者の要因である。先ずデイヴィッドは彼のところで暮す。後になってからはトラッドルスが暮す。最後にミスタ・ミコーバーが家族共にユライアの家に住むことになる。一方彼はヴィックフィールドとヒープの事務所で書記として働く。

この図表の配置で、役に立たぬ技能に専念する一人の作家の作品をも図式的に正確に取り扱うことができるということを、示しえたと思っている。このような考察方法は同様にディケンズの他の小説に転用することができる。この方法はすぐれた小説一般に転用が可能である。彼の大部分の小説では、ストーリーを単調なものとさせず、また緊張感を弱めないために、対比の方法が精巧に創出されている。殆んど全ての偉大な小説家はこの手段を重視し、それで強烈な効果を狙っている。特に私が想起するのはシュピールハーゲン (Spielhagen) とフォンターネ (Fontane) である。

我々はディケンズがその小説作品の中で対比を創出することを重視してきたことを示してきた。そういう訳で、フライタークもこの点でディケンズの物語作品から刺激をうけたことは可能と考えられる。なんとなればフライタークはディケンズのように天才的また独創的な色彩を厚く塗り上げることはできなかったのだから。それに反して彼の俗物的傾向が台頭してきた。つまり彼はディケンズより一層図式化をはかったのである。

ゾイフェルトは、彼の行なったような分析的考察が芸術作品という有機的組織を破壊すること、またこうした方法には硬直したところ、図式的なところが付着していることを認めている。狭い意味で純粋に詩的なもの、気分、「まどろみつついまだ形を成していないもの、純粋に感じられるもの」を我々は無視しなくてはならぬ<sup>13)</sup>。このことは『借方と貸方』についてのゾイフェルトの評論でもおこっているが、彼の『緑のハインリヒ』評論ではおこってはいない<sup>14)</sup>。この作品批評では純粋に感じとられうるものが再び織り込まれている。この長編小説の気分は、『緑のハインリヒ』に内面的に親近感をおぼえるゾイフェルト自身に伝染している。一方『借方と貸方』は

彼の心を動かさない。確かに疑いもなくケラーの才能よりもすぐれておらず、独創的でもないが、それにも拘らずその独自性が評価されなくてはならぬフライタークの才能をゾイフェルトは認めていない。そしてそのために彼の『借方と貸方』に対する美学的評価は、私の考えでは、完全に公平な結果とはなっていない。

### 第二節の注

- 1) S. 181 ff.
- 2) Erinn., S. 182.
- 3) GRMs. I. Jg. 10. Heft, S. 599 ff.
- 4) Ernst Decsey の R. Hans Bart の作品批評 (Österr. Rundschau, Wien, XXI. 2. 1909) の折りになげかけた弾劾判決を比較すること。ゾイフェルト論文に基づいて Decsey は『借方と貸方』の芸術的価値を完全に否定している。
- 5) a. a. O., S. 606.
- 6) S. 182.
- 7) Seuffert, a. a. O., S. 606.
- 8) vgl. Otto Ludwig, VI. 138.
- 9) s. o. S. 73.
- 10) DC. I. 500 ff.
- 11) CD. II. 481 ff.
- 12) s. o. S. 81 f.
- 13) Seuffert a. a. O., S. 600.
- 14) Seuffert a. a. O., S. 607 ff.

### 第三節 登場人物の名前の類似

ディケンズについてもフライタークについても我々は、彼らとその作品の登場人物のための名前を選択するにあたって多大な努力を払い、かつその名前によってすでに人物の性格を示すことを特に重視していた、ということを知っている。ディケンズにあってはまたしてもユーモアと奇抜さが表現されている。ニクルビー、チャズルウィット (Chuzzlewit), ヴィティタリー (Wititterly), キッターミンスター (Kidderminster), ターヴィドロップ (Turveydrop), ポズナップ (Podsnap), タルランブル (Tulrumbel) その他の名前を一考えていただきたい。この上もなく風変わりで、空想的な形姿が彼の口先きまで出かかっている。そこで我々はジャン・パウル (Jean Paul) を想起させられるのだ。フライタークにとって、当該人物に相応しい名前を見つけることは苦悶にみちた熟考を要求されたのである。彼自身この検索が容易ならざる問題だといっている<sup>1)</sup>。彼のつける名前は、彼の小説自体と同様、軽快な俗物根性を備えた外見を示している。アントン・ヴォールフェールト, ザビーネ・シュレーター, バウマン氏, シュベヒト氏, フェーリクス・ヴェールナー (Felix Werner), イルゼ・バウアー (Ilse Bauer), フンメル (Hummel) 氏とハーン (Hahn) 氏などを比較していただきたい。フライタークがこの点でディケンズの刺激をうけたということはあるまいことである。ピックス (Pix), プルツェル

(Purzel), シュペヒト (Specht), フンメル, フィンクのその他はディケンズのつけた名前を想起させる。

更に注目すべきことは、——勿論こういっことは偶然ではあろうが——『デイヴィッド・コパーフィールド』や『ニコラス・ニクルビー』および『借方と貸方』の登場人物の名前のいくつかが似通っていることである。ユライアがデイヴィッドの許で夜をすごし、また眠っている「悪漢」の醜い姿がデイヴィッドを休ませないあの光景を読んだとき、私は『借方と貸方』の中の類似のシーンを思い出したのである<sup>2)</sup>。このシーンではファイテルが眠っているヒップスをびっくりさせ、それを見守っている<sup>3)</sup>。同時に「ヒップス」(Hippus)と「ヒープ」(Heep 会話語ではヒップ Hip) という名前の類似も目についた。

フライタークがいく度か『ニコラス・ニクルビー』のチャリブル (Cheeryble) 兄弟を翻訳して「ヴォールゲムート」(Wohlgemuth) とのべたことは既に話題にした<sup>4)</sup>。フライタークはこの名前を自分の胸中にしまっておき、それを彼の友人モリナリ (Molinari) 兄弟と較べてみた<sup>5)</sup>。ところでヴォールファールト (Wohlfahrt) という名前はヴォールゲムート (Wohlgemuth) を強く思い出させはしないだろうか? 「ヴォールゲムート」から我々は、この名前を有する人の他の人の心を惹きつけるような、愛すべき性格を感じとる。「ヴォールファールト」(Wohlfahrt—繁栄) という名前は非のうちどころのない、有能かつ幸せなアントンの一生を特徴づけている。その他に、その性格や行動が大いに似ている二人の人物が殆んど同一の洗礼名をもっている。つまりローザ・ダートル (Rosa Dartle) とロザリーエ・エーレンタール (Rosalie Ehrental) という名前を有していることは注目に値する。

たとえこの点でもやはり影響があるとするのは行きすぎである。にも拘らず、名前にも若干の類似点が存在するという事は重要なことである。この論文を完全にするために、この点を持ち出すことは正当であると私は思っている。

(完)

### 第三節の注

- 1) Erinn., S. 180.
- 2) DC. I. 473 f.
- 3) SH. II. 76.
- 4) s. o. S. 17.
- 5) Erinn., S. 119.

## Inhalt.

---

	Seite
<b>Benutzte Literatur</b> . . . . .	<b>XI</b>
<b>I. Vorbedingungen für den Einfluß von Dickens auf Freytag</b> . . . . .	<b>I</b>
1. Einleitung. (Der Einfluß von Dickens auf deutsches Leben und deutsche Literatur) . . . . .	I
2. Vergleich der Individualitäten beider Autoren . . . . .	4
a) Ähnlichkeit ihrer Betätigung, Ansichten, Tendenzen, literar. Richtung . . . . .	4
b) Verwandtschaft beider Autoren in Naturell und künstlerischer Veranlagung . . . . .	10
3. Freytags Kenntnisse des Englischen. Zeit seiner Beschäftigung mit Dickens . . . . .	14
4. Freytags Arbeitsweise, die ihn literarischen Einflüssen besonders zugänglich machte . . . . .	20
<b>II. Stoffvergleichung Dickensscher Romane mit »Soll und Haben«</b> . . . . .	<b>22</b>
Die Vorbilder aus »David Copperfield«, »Nicholas Nickleby« und »Oliver Twist« zu den Figuren in »Soll und Haben« . . . . .	23
1. Steerforth (DC.) — Fink (SH.) <sup>1)</sup> . . . . .	23
2. Uria Heep (DC.), Ralph Nickleby (Nich. N.) und Bill Sikes (Ol. T.) — Veitel Itzig (SH.) . . . . .	39
3. David Copperfield (DC.) — Anton Wohlfahrt (SH.) . . . . .	51
4. Dora Spenlow (DC.) — Lenore und Baronin Rothsattel (SH.) . . . . .	55
5. Agnes Wickfield (DC.) — Sabine Schröter (SH.) . . . . .	64
6. a) Mr. Wickfield (DC.) — Schröter, Ehrenthal (SH.) . . . . .	69
b) Mrs. Steerforth (DC.) — Ehrenthal (SH.) . . . . .	71
7. Rosa Dartle (DC.) — Rosalie Ehrenthal (SH.) . . . . .	75
<hr style="width: 20%; margin-left: 0;"/> <p style="margin-left: 20px;"><sup>1)</sup> Abkürzungen: David Copperfield = DC., Soll und Haben = SH., Nicholas Nickleby = Nich. N., Oliver Twist = Ol. T.</p>	
	Seite
8. Dr. Strong (DC.) — Bernhard Ehrenthal (SH.) . . . . .	77
9. Tim Linkinwater (Nich. N.) — Die Schröterschen Komptoiristen (SH.) . . . . .	78
10. Mr. Peggotty, Mr. Barkis (DC.) — Auflader Sturm (SH.) . . . . .	81
<b>III. Ähnlichkeit in der Romantechnik von Dickens und Freytag</b> . . . . .	<b>83</b>
1. Aufbau der Handlung . . . . .	83
2. Kontrastfiguren, Gegen- und Parallelhandlung . . . . .	89
3. Ähnlichkeit der Namen von Romanfiguren . . . . .	97

Benutzte Literatur.<sup>1)</sup>

- Abkürzungen
- Blätter für literarische Unterhaltung. = *B. f. l. U.*  
Jahrgang 1839.
- Wilhelm Dibelius, Englische Romankunst. = *Dibelius.*  
2 Bde. Palaestra XCII und XCVIII. Berlin  
1910.
- Charles Dickens, David Copperfield, 3 Bde. = *DC.*  
Tauchnitz. Ferner in der Übersetzung von  
J. Wege. 2 Bde. Reclam.
- Nicholas Nickleby. 2 Bde. Tauchnitz. Ferner = *Nich. N.*  
in der Übersetzung von Julius Seybt. 2. Bde.  
Reclam.
- Oliver Twist, 1 Bd., Tauchnitz. Ferner in der = *Ol. T.*  
Übersetzung von J. Seybt. 1 Bd. Reclam.
- Louis Cazamian, Le roman social en Angleterre  
(1830—50.) Paris 1904.
- John Forster, Ch. Dickens' Leben. Übersetzt  
von Friedr. Althaus. Berlin 1873/75.
- Gustav Freytag, Gesammelte Werke. 2. Aufl.  
1. Bd. Leipzig 1896. (Erinnerungen aus mei- = *Erinn.*  
nem Leben.)
- Soll und Haben. 54. Aufl. Leipzig 1901. = *SH.*
- Die Verlorene Handschrift. 35. Aufl. Leipzig = *VH.*  
1902.
- Die Ahnen. VI. Bd. Leipzig 1880.
- Gesammelte Aufsätze. 2. Bd. Leipzig 1888. = *Ges. Aufs.*
- Vermischte Aufsätze, her. v. Ernst Elster.  
Leipzig 1901.

<sup>1)</sup> In dieser Bibliographie sind nur die mit Erfolg ver-  
wendeten Hilfsmittel und Quellen verzeichnet.

- Abkürzungen
- Gustav-Freytag und Herzog Ernst v. Co. = *Freytag-Coburg.*  
Coburg im Briefwechsel, 1853—93, her. v.  
E. Tempelhey. Leipzig 1904.
- an Salomon Hirzel und die Seinen. Als = *Freytag-Hirzel.*  
Handschrift für Freunde gedruckt. Leip-  
zig 1903.
- und Heinrich v. Treitschke im Brief- = *Freytag-Treitschke.*  
wechsel. Leipzig 1900.
- Käte Friedemann, Die Rolle des Erzäh- = *Friedemann.*  
lers in der Epik. (Untersuchungen zur  
neueren Sprach- und Literaturgeschichte  
her. v. Oskar F. Walzel. Neue Folge.  
VII. H.) Leipzig 1910.

- Leon Kellner, Die englische Literatur im = *Kellner*.  
Zeitalter der Königin Viktoria. Leipzig  
1909.
- Hans Lindau, Gustav Freytag. Leipzig = *Lindau*.  
1907.
- Otto Ludwig, Gesammelte Schriften. Bd. 6. = *Otto Ludwig*.  
Leipzig 1891.
- Otto Mayrhofer, Gustav Freytag und das = *Mayrhofer*.  
Junge Deutschland. Nr. 1. der Beiträge  
zur deutschen Litwiss., her. v. E. Elster.  
Marburg 1907.
- Hellmuth Mielke, Der deutsche Roman des = *Mielke*.  
19. Jahrhunderts. Braunschweig 1890.
- Léon Pineau, L'évolution du roman en  
Allemagne au XIX. siècle. Paris 1908.
- Robert Prutz, Die deutsche Literatur der  
Gegenwart, 1848—58. I. Bd. Leipzig 1859.
- Bernhard Seuffert, Beobachtungen über = *Seuffert*.  
dichterische Komposition. I. Germ.-Ro- = *G. R. Ms.*  
man. Monatsschrift. 1. Jahrg. 10. Heft.  
Heidelberg 1909.
- Paul Ulrich, Gustav Freytags Romantech- = *Ulrich*.  
nik. Nr. 3 der Beiträge zur deutschen  
Litwiss., her. v. Ernst Elster. Marburg  
1907.
- Vera Völk, Ch. Dickens' Einfluß auf Gustav = *Völk*.  
Freytags »Soll und Haben«. 4. Jahres-  
bericht des Salzburger Mädchenlyzeums.  
Salzburg 1908.
-

## あ と が き

訳文末尾の原著者使用文献表に明示されているように、著者フライモントはディケンズ作品からの引用文は主としてレクラム版独訳書を用いている。この独訳は現在入手できないので参照確認はできないが、『デイヴィッド・コパーフィールド』の登場人物エミリー (Emily) を著者は全てエムリー (Emly) と表記している。翻訳の際にはフライモントの文章を尊重して訂正はしなかった。他の人名については問題はない。全ての登場人物名は、必要がある場合をのぞいて、初出の場合にかぎり原名を括弧に入れて併記した。しかし図表には訳名はのせなかった。図表以外の箇所では訳名が記載されていることと、原名と訳名を併記することでかえって読みにくくなることをおそれたからである。

なおギリシャ語の部分について西勝忠男教授（哲学）にご教示をいただいたことをここに記して御礼を申し上げます。